鳥取市文化財報告書23

鳥取市文化財報告書23

桂見古墳群・桂見遺跡発掘調査概要報告書

一九八八

鳥取市教育委員会

鳥取市文化財報告書23

桂見古墳群・桂見遺跡
発掘調査概要報告書

1988

鳥取市教育委員会

桂見古墳群・桂見遺跡
発掘調査概要報告書

１９８８

鳥取市教育委員会

序　　　文

この発掘調査報告書は、昭和62年度の国庫補助事業として実施した桂見古墳群及び桂見遺跡の調査記録です。

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき貴重な市民の財産です。このような認識のもと、鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関との協議を重ね、また地元の方々の深いご理解をいただきながら文化財保護行政を進めているところです。

さて、本年度に実施しました発掘調査も地権者の方々をはじめとする関係各位のご協力によって、無事所期の目的をはたしここに報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

昭和63年３月

鳥取市教育委員会
教育長　田村一三

例　　　言

1．本書は、昭和62年度に国、県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．調査を実施した遺跡は、鳥取市桂見字西谷626ほかに所在する桂見古墳群・桂見遺跡である。

3．本書に用いた方位は、遺跡分布図は真北を示し、その他は磁北を示す。

4．遺構名の略号は、ＳＤは溝状遺構、ＳＫは土坑、ＳＸは埋葬施設を表す。またＴはトレンチの略号であり、遺構名の頭文字は調査区名を示す。（ｅｘ：ＡＳＤ－１，Ａ区のＳＤ－１）

5．トレンチ実測図中の遺物出土地点に付した番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。また写真図版中の遺物番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。

6．遺物実測図のスケールは、土器は1/4、石製品は1/2である。

7．出土した石製品の石材鑑定については、鳥取県教育研修センター山名巌氏の御教示を受けた。

8．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。

9．発掘調査の体制は、下記のとおりである。

発掘調査主体	鳥取市教育委員会　教育長　田村一三
調査指導	鳥取県教育委員会
事務局	鳥取市教育委員会　社会教育課
調査担当者	小杉宗雄　平川誠　西村昇　山田真宏

本　文　目　次

序文
例言
Ⅰ　発掘調査にいたる経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　発掘調査の概要 …… 7
　1　調査の方法と経過 …… 7
　2　トレンチ調査の概要 …… 7
Ⅳ　小結 …… 28

図　版　目　次

図版１　1．調査地遠景（北から）　2．調査地遠景（南東から）
　3．調査地近景（T26～29・北から）　4．桂見６号墳（北側・後円部から）
図版２　1．第１トレンチ（北から）　2．第２トレンチ（北から）
　3．第２トレンチ・ASX－１検出状況（北から）
　4．第２トレンチ・ASX－１完掘状況（北から）
図版３　1．第４トレンチ（北から）　2．第４トレンチ（南から）
　3．第７トレンチ（南から）　4．第５トレンチ（南から）
図版４　1．第11トレンチ（北から）　2．第12トレンチ（東から）
　3．第18トレンチ（南から）　4．第20トレンチ（北から）
図版５　1．第26トレンチ（東から）　2．第26トレンチ・ESK－１（東から）
　3．第27トレンチ（西から）　4．第29トレンチ（西から）
図版６　トレンチ出土遺物（T２・11・19・20・22・26・28・29）
図版７　トレンチ出土遺物（表採・T33・34・35）

挿　図　目　次

第１図　鳥取市北西部主要遺跡分布図 …… 3
第２図　鳥取市桂見周辺遺跡分布図 …… 4
第３図　表採石錘実測図 …… 5

第４図　表採縄文土器実測図 …… 6
第５図　トレンチ配置図 …… 8
第６図　Ｔ２・ＡＳＸ－１実測図 …… 9
第７図　トレンチ実測図（Ｔ１・２） …… 10
第８図　トレンチ実測図（Ｔ３・４・７・８） …… 折り込み 2
第９図　トレンチ実測図（Ｔ６・９・14・15・16・25） …… 12
第10図　トレンチ実測図（Ｔ５） …… 13
第11図　トレンチ実測図（Ｔ10・11・12） …… 14
第12図　トレンチ出土遺物実測図（Ｔ２・11・19・20・22・25） …… 15
第13図　トレンチ実測図（Ｔ13・18・19・20・21・22） …… 16
第14図　桂見６号墳墳丘実測図 …… 折り込み 3
第15図　トレンチ実測図（Ｔ26） …… 18
第16図　Ｔ26・ＥＳＫ－１遺物出土状況実測図 …… 18
第17図　トレンチ出土遺物実測図（Ｔ26） …… 19
第18図　トレンチ実測図（Ｔ27・28・29） …… 20
第19図　トレンチ出土遺物実測図（Ｔ27・28・29・33） …… 21
第20図　トレンチ出土遺物実測図（Ｔ33・34・35） …… 23
第21図　トレンチ実測図（Ｔ23・24・30・31） …… 24
第22図　トレンチ実測図（Ｔ32・33・34・35） …… 25

挿　表　目　次

第１表　鳥取市桂見周辺遺跡分布図対照表 …… 折り込み 1
第２表　調査トレンチ一覧表 …… 27

Ⅰ　発掘調査にいたる経過

桂見古墳群・桂見遺跡は、鳥取市西方の湖山池南東岸に所在する。桂見遺跡は、ほ場整備事業に伴う昭和51年の調査によって日本海沿岸に特徴的な低湿地性の縄文遺跡であることが判明し、鳥取県におけるこの種の遺跡の初めての発掘調査となった。縄文時代後期を主体とする土器とともに、豊富な木製品が出土し注目をあつめた。桂見古墳群は９基からなる古墳群として知られており、昭和58年の土砂採取事業に伴う調査では３基の方形墳が調査され、古墳時代前期における当地の様相の一端が明らかとなった。また、このときの調査では弥生時代、中世の墳墓も調査されている。桂見周辺部では、西桂見四隅突出型方形墓、国指定史跡となっている布勢古墳、布勢グラウンド遺跡、高住銅鐸出土地などが良く知られている。鳥取市内でも有数かつ重要な遺跡密集地である。

さて、このような桂見地区に民間企業による宅地開発事業の計画がもちあがったのは、昭和61年11月のことである。鳥取市教育委員会は、さっそく事業計画者と埋蔵文化財の保護について協議を重ねるところとなった。開発事業計画では、桂見古墳群、桂見遺跡の所在する桂見集落の背後の丘陵とその前面の農用地を開発して約240戸の住宅用地を造成するというものである。

開発事業の具体的な計画が明らかとなったため、鳥取市教育委員会では、事業計画地内の埋蔵文化財についてより詳細な分布状況を把握し、早急に造成工事計画との調整を計る必要性が生じたのである。このため、鳥取市教育委員会では、鳥取県教育委員会の指導を得ながら当該地の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、鳥取市教育委員会の直営事業として実施した。調査の方法は、開発事業計画を勘案しながら合計34本のトレンチを設定して行い、発掘調査の総面積は358㎡である。調査の終了後には、すべてのトレンチについて埋め戻しを行った。

発掘調査は、昭和62年12月16日から現地での調査準備を開始し、昭和63年１月18日から伐開、トレンチ掘削等の作業にはいった。実測、写真撮影等の作業をへて、３月３日までにほぼ現地での作業を終了した。整理、報告書作成作業は、調査完了後のトレンチから順次行い３月19日をもって全ての発掘調査作業を終了した。調査に際して以下の方々のご協力を得た。記して深謝いたします。

土地所有者　徳田千花枝　森本健太郎　北脇藤七　大野理一郎　森本治雄　森本基寛　北脇清志
田中利幸　森本善雄　北脇恒雄

調査協力　日建工業株式会社　鳥取県埋蔵文化財センター
田中美智枝　中谷沢子　毎野静枝　宮脇君枝　福田喜代子　福田周治　福田末子
谷口恭子　大江修二　浜野るみ子　岡垣清子　河口亜由美　平辻暢子　福田美奈子
久保穣二朗　絹見安明　前田均　杉谷美恵子　奥田繁太郎　岩垣伸治　北浦弘人
谷口忠章

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境（第1，2図，第1表）

鳥取市は県東部にあって、千代川の沖積平野（鳥取平野）を市域の中心とした面積239万㎡、人口約13万人を擁する山陰の主要都市である。桂見古墳群及び桂見遺跡は、鳥取駅から約5㎞西方の桂見地内に所在し、前者は、鳥取市の西北部に広がる湖山池の東南岸に張り出した標高約40ｍの小丘陵上に立地し、後者は、その北側に広がる沖積地に立地する。今回の試掘調査地は、鳥取市の遺跡分布図上に、前方後円墳1基、円墳2基及び遺物散布地の存在が記載されている。

鳥取市桂見は、明治10年に倉見、三谷両集落の合併によって桂見村として成立した地区で、両地区とも冬の北西風を避けるように丘陵の東麓に集落を展開している。地理的には、中国山地から延びる丘陵と湖山池が近接する位置にあたり、千代川左岸にひらけた高草平野あるいは千代水平野と呼ばれる鳥取平野西部地域への西からの入口となっている。

潟湖である湖山池の周辺は水田として利用される農村地帯であるが、昭和60年に開催されたわかとり国体の主会場建設工事や宅地造成等によって近年大きく変貌してきている。またそれに伴う事前調査によって貴重な遺跡が発見・発掘され、市内でも遺跡の密度の高い地域となっている。

湖山池周辺の平野部縁辺に人々が生活の場を求めた初源は、縄文時代に遡る。同時代の遺跡としては、古くから知られていた青島遺跡(1)のほか、桂見遺跡(2)、布勢グラウンド遺跡(3)等の低湿地性遺跡がある。昭和51年の調査によると、桂見遺跡からは主として中期末から後期初頭にかけての土器とともに、櫂、舟状木製品等大量の木製品や種子類が出土している。今回の調査中にも、水田中から縄文土器及び石錘を表採している（第3，4図）。また昭和55年に調査された布勢グラウンド遺跡からは、主として後期前半の土器とともに、杭と板による木組み遺構、櫛、鉢、ひしゃく、漆塗木器等の木製品やもじり編みのカゴ等が出土しており、この地域の縄文文化の豊かさをしのばせる。このほか縄文土器を出土した遺跡として、帆城遺跡(4)、天神山遺跡(5)、湖山第2遺跡(6)、古海遺跡(7)がある。

弥生時代に入ると、鳥取平野の段丘や自然堤防、微高地上に生活の場が営まれる。前・中期の柱穴や多量の弥生土器が出土した岩吉遺跡(8)、中・後期の住居跡を検出した布勢グラウンド第2遺跡(9)、中期末から後期初頭の竪穴住居跡25棟が検出された湖山第2遺跡、後期中葉に比定される住居跡1棟が検出された帆城遺跡、その他天神山遺跡、古海遺跡、大桷遺跡(10)等が知られている。このほか、後期後半から古墳時代にかけての祭祀遺跡と考えられる塞ノ谷遺跡(11)、高住の流水文銅鐸（偏紐式）出土地がある。また昭和58年の桂見墳墓群(12)の調査（土壙墓11基）では、隅丸長方形の土壙墓から弥生時代後期後半の土器や玉類、鉄器が出土しており、さらに湖山池を一望する丘陵上の西桂見遺跡(13)では、最大級の規模を有する四隅突出型方形墓（東西辺64ｍ、高さ5ｍ）が築造されている。ここからは、特殊大型土器類が出土している。

古墳時代に入ると鳥取平野の生産基盤の拡充を背景として、湖山池周辺の丘陵上に大小様々な古墳が造営されるようになる。昭和58年に調査された桂見墳墓群の古墳3基のうち、桂見2号墳は、

1	桂見墳墓群	12	布勢(グラウンド) 遺跡
2	西桂見遺跡	13	大桷遺跡
3	布勢1号墳	14	帆城遺跡
4	桷間1号墳	15	天神山遺跡
5	古海36号墳	16	湖山第2遺跡
6	山ケ鼻古墳	17	岩吉遺跡
7	大熊段1号墳	18	青島遺跡
8	三浦1号墳	19	塞ノ谷遺跡
9	高住1号墳	20	松原谷田遺跡
10	良田2号墳	21	つづらお遺跡
11	桂見遺跡	22	高住銅鐸出土地

凡　例

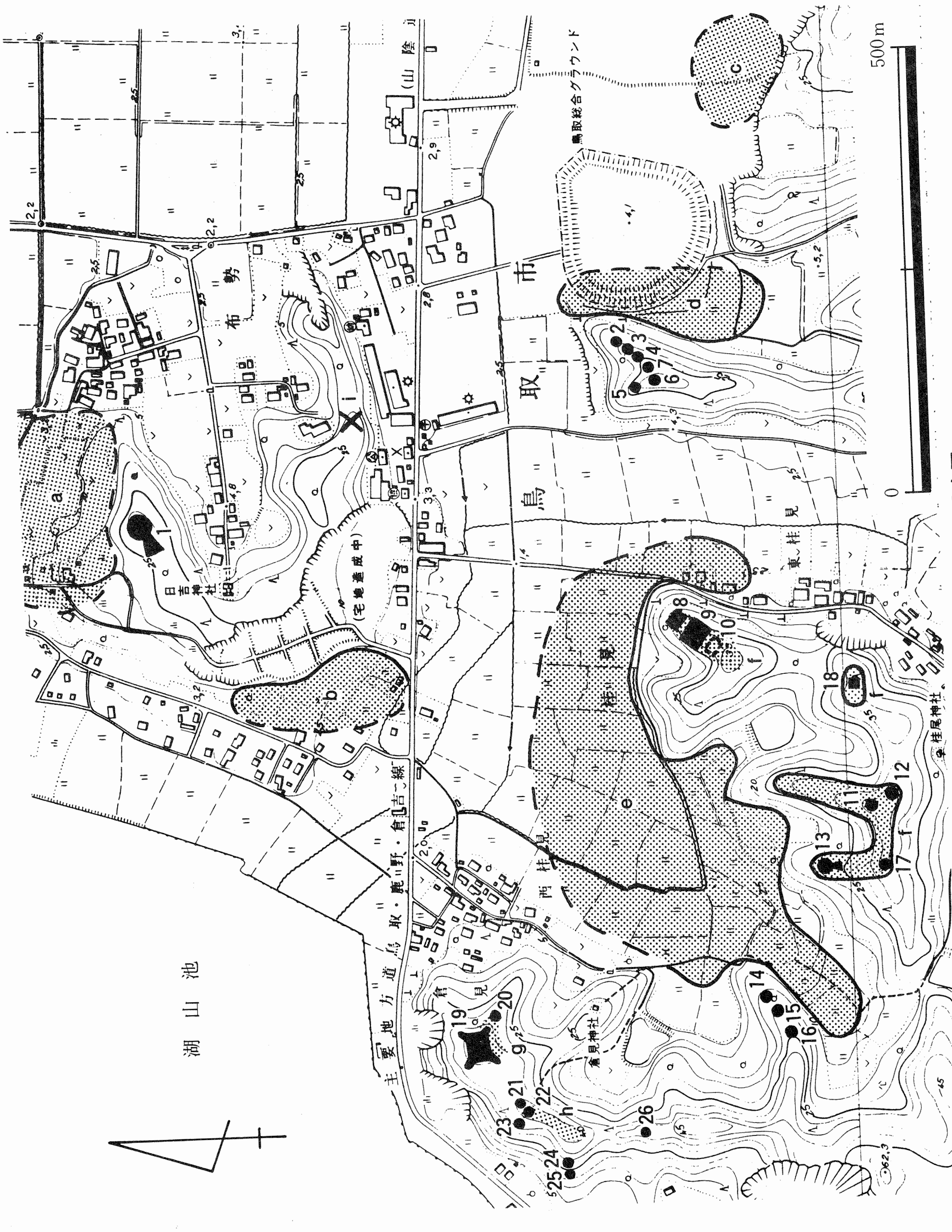
古墳密集地

集落遺跡、他

主要古墳

城跡

第1図　鳥取市北西部主要遺跡分布図



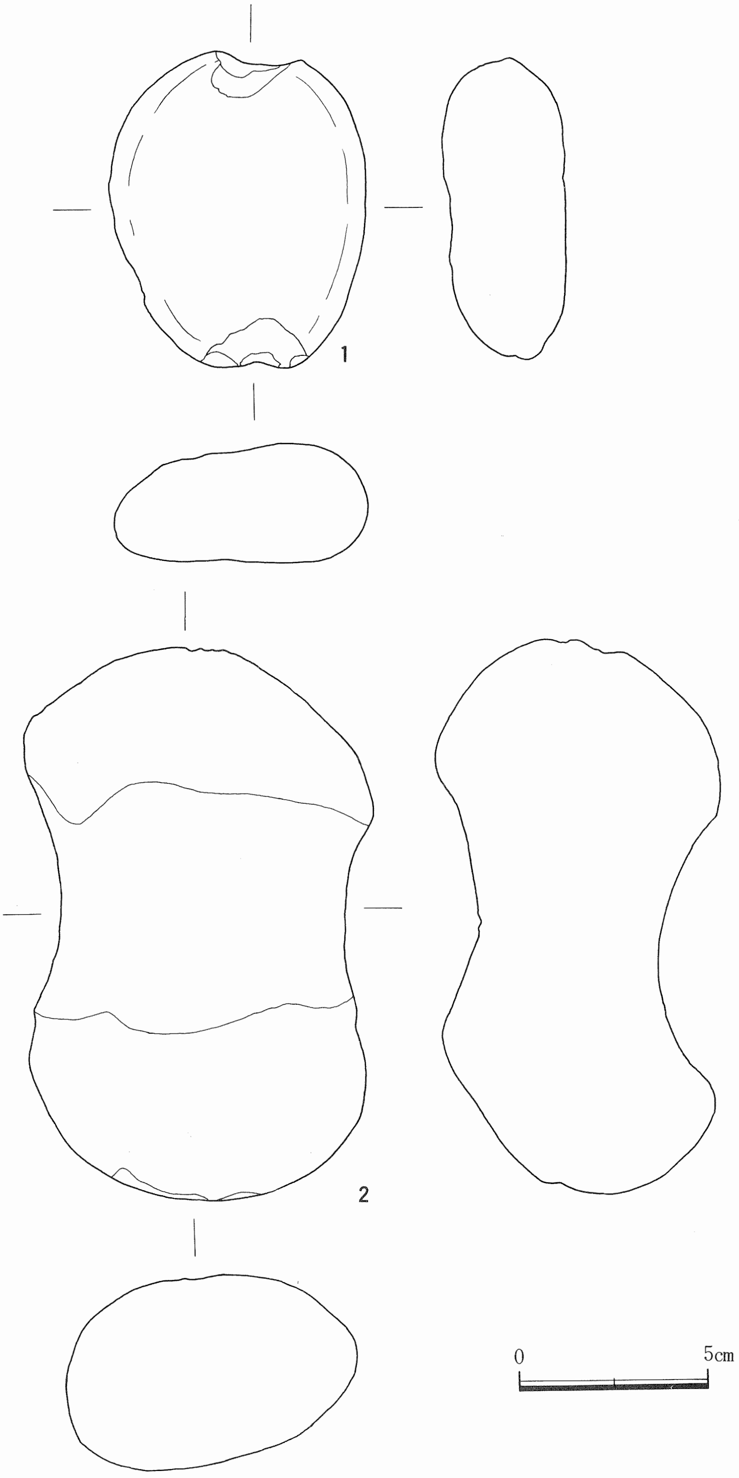
第2図　鳥取市桂見周辺遺跡分布図

第1表　鳥取市桂見周辺遺跡分布図対照表

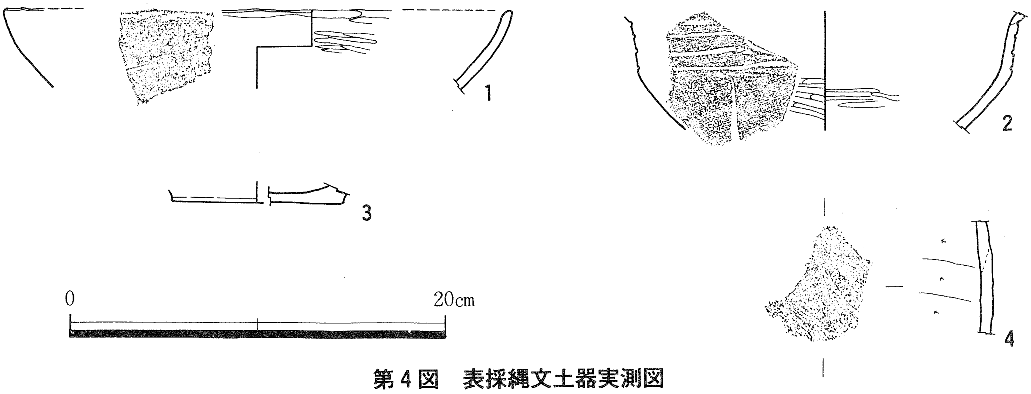
	名　称	種類・規模（m）	概要 埋葬施設・遺構	概要 出土遺物	『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』記載の番号・名称	文　献	備　考
1	布勢1号墳	前方後円墳（59×5）		盗掘坑から，埴輪・土師器・須恵器	131 布勢1号墳	県教委『鳥取県文化財調査報告書』第11集　1979年	国指定史跡
2	布勢2号墳	円墳（——）			133～135布勢2～4号墳。		7とともに段状に連らなるが，明確な墳丘を持たない。
3	布勢3号墳	円墳（——）					
4	布勢4号墳	円墳（——）					
5	布勢5号墳	円墳（10×1.5）			136 布勢5号墳		墳丘上に角礫あり
6	布勢6号墳	円墳（——）			137 布勢6号墳		丘陵頂部に2～3の小円丘が認められ，中・近世墓の可能性
7	布勢7号墳	円墳（——）					
8	桂見1号墳	方形墳（22×2.5）	土壙（木棺）5	土師器・鉄剣・刀子・鉄鏃 ガラス管玉・ガラス小玉	104 桂見1号墳	鳥取市教委『桂見墳墓群』1984年	遺跡地図の規模 12m×1.3m　消滅
9	桂見2号墳	方形墳（22×4.5）	土壙（木棺）1 配石土壙（木棺）1 土器棺1	土師器・鉄刀・鉇・針・刀子 銅鏡		〃	消滅
10	桂見3号墳	——	土壙（木棺）1	土師器		〃	消滅
11	桂見4号墳	円墳？（——）			106 桂見3号墳	本報告書	第5トレンチ
12	桂見5号墳	円墳？（——）			105 桂見2号墳	〃	第6トレンチ
13	桂見6号墳	前方後円墳（25.5×2.5）		墳丘から土師器・須恵器 周溝から土師器片		〃	第18～22トレンチ
14	桂見7号墳	円墳？（——）		墳丘から土師器片			果樹園にて墳丘変形し，遺存状態不良
15	桂見8号墳	円墳？（——）					
16	桂見9号墳	円墳（15×1）					
17	桂見10号墳	円墳？（——）		土師器		本報告書	第11トレンチ
18	桂見11号墳	方墳？（——）				〃	第15，16トレンチ
19	西桂見遺跡 四隅突出型方形墓	四隅突出型方形墓（64×5）	土壙（木棺）1以上	大型特殊土器・弥生土器		鳥取市教委『西桂見遺跡』1981年	1981年調査　消滅
20	倉見1号墳	円墳（——）		周溝から土師器高杯		〃	〃
21	倉見2号墳	円墳（10×1）			108 倉見1号墳	鳥取市教委『西桂見遺跡Ⅱ』1984年	1980年調査　消滅
22	倉見3号墳	円墳（20×2.5）	土壙（木棺）1	土師器器台（枕）・鉄剣	109 倉見2号墳	〃	〃
23	倉見4号墳	円墳（12×1）	土壙（木棺）1	土師器器台（枕）・鉄鉾・刀子 墳頂から土師器群		〃	〃
24	倉見5号墳	円墳（16×2.5）	土壙（木棺）2	土師器器台・壺（枕）・枕石・鉇	112 倉見5号墳	〃	1981年調査　消滅
25	倉見6号墳	円墳（10×—）	土壙（木棺）1			〃	〃
26	倉見7号墳	円墳（12×1）			113 倉見6号墳		
a	布勢遺跡	弥生～古墳		弥生土器・土師器・須恵器	132 布勢遺跡		
b	帆城遺跡	縄文～中世	竪穴住居址・井戸 溝状遺構	縄文土器・弥生土器・土師器 須恵器・石製品・木製品・陶磁器		鳥取市教委『帆城遺跡・天神山遺跡調査報告』1982年	1981～1982年調査
c	布勢グラウンド遺跡	縄文～弥生	炉址	縄文土器・弥生土器・石器 木製品・自然遺物	163 布勢遺跡	鳥取県教育文化財団『布勢遺跡発掘調査報告書』1981年	1980～1981年調査
d	布勢グラウンド第2遺跡	弥生～中世	竪穴住居址・井戸 掘立柱建物・池	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石製品・木製品・玉未製品		〃	1980～1981年調査 消滅
e	桂見遺跡	縄文～奈良・平安	貯蔵穴・杭列	縄文土器・弥生土器・土師器 須恵器・石器・木製品・自然遺物	一部107 桂見遺跡	鳥取市教委『桂見遺跡』1977年・本報告書	1976年調査
f	桂見遺跡（墳墓群）	弥生・古墳・中世	弥生時代土壙墓 古墳・中世墓	弥生土器・土師器・土師質土器 陶磁器・石製品・金属製品・玉類		鳥取市教委『桂見墳墓群』1984年・本報告書	1983年調査
g	西桂見遺跡（A地区）	弥生・古墳・中世	四隅突出型方形墓 土壙墓・古墳・中世墓	〃（玉類を除く）		鳥取市教委『西桂見遺跡』1981年	1981年調査　消滅
h	西桂見遺跡（B・C・D地区）	弥生・古墳・中世	弥生時代土壙墓 古墳・中世墓	〃		鳥取市教委『西桂見遺跡Ⅱ』1984年	1980～1981年調査 消滅
i	布勢経塚	経塚		一石一字経	139 布勢経塚		

3基の埋葬施設を有する古墳時代前期の方形墳である。第1主体部には7.5m×4.9mの墓壙に長さ4.3m、幅1mの水銀朱を施した長大な木棺が納められ、内部には後漢後期のものと考えられる内行花文鏡、斜縁獣帯鏡、鉄刀、刀子、針状鉄製品などの豊富な遺物が副葬されていた。また、昭和55年調査された倉見(くらみ)古墳群[14]中の5基は、古墳時代前期後半から中期初頭の円墳である。これらの古墳も桂見古墳群と同様に長い墓壙と木棺施設を主体部とするもので、土師器転用枕、鉄器類が出土した。なお、小古墳群としてはこれらの他に古墳時代中期の里仁(さとに)古墳群[15]があり、箱式石棺、埴輪棺、木棺墓から鉄製品、玉類等が出土している。

その他湖山池の南岸から南東岸にかけては前方後円墳が集中しており、鳥取県東部で最大の全長92mの桷間(かくま)1号墳をはじめとして、布勢1号墳[16](59m)、大熊段(おおくまだん)1号墳[17](51m)、三浦(みうら)1号墳[18](36m)、松原(まつばら)5号墳(33.5m)、松原7号墳(54m)、良田(よしだ)15号墳(36m)、高住(たかずみ)1号墳(30m)がある。また、前方後方墳である古海(ふるみ)36号墳(67m)もこの地域に所在している。



第3図　表採石錘実測図



第4図　表採縄文土器実測図

全体的にみると、千代川左岸地域には横穴式石室を持つ後期古墳は少なく、前期～中期の古墳が顕著である。このような中で湖山池周辺における後期古墳の例としては葦岡長者古墳(あしおかちょうじゃ)（吉岡(よしおか)1号墳）[19]があげられる。吉岡温泉町に所在するこの古墳は6世紀後半代の両袖の横穴式石室を持つ古墳で、多くの須恵器類や鉄刀とともに釣針が検出されており、千代川左岸の後期古墳の例として貴重なものとなっている。このほか、高住12号墳[20]、くりぬきの石棺式石室を持つ山ケ鼻(やまがはな)古墳[21]（古海13号墳）等が知られる。

律令体制下になるとこの地域は高草郡に組み込まれ、湖山池東岸の地域は東大寺領高庭荘(たかばのしょう)として整備開発が進められた。この時期（8世紀半ば～11世紀初頭）の遺跡として桂見遺跡、大桷遺跡、古海遺跡等をあげることができるが、集落等の実体は不明である。ただ、この地域の式内社として南西岸に天日名鳥命(あめのひなどりのみこと)神社、天穂日命(あめのほひのみこと)神社があり、特に後者は9世紀には因幡国最高位の正三位の神階を与えられており、平安時代の初めにあっても湖山池を中心としてこの地域が政治的にも文化的にも優位にたっていたことがうかがわれる。

15世紀に入ると、湖山池東岸に因幡国守護山名氏によって布勢天神山城[22]が築かれ因幡支配の拠点となった。この時期の考古学的な調査事例としては、天神山城の部分的な調査のほか、昭和55年及び昭和58年に西桂見遺跡、桂見墳墓群から発見された土葬墓、火葬墓の調査や布勢グラウンド第2遺跡の池状遺構を伴う集落跡の調査がある。また、この時期の石造物として山王社(さんのうしゃ)境内に宝篋印塔[23]が残されている。

Ⅲ　発掘調査の概要

1．調査の方法と経過（第5図）

発掘調査は、前述のとおり今後予想される開発計画の調整資料を得るための試掘調査という基本的な性格のため、遺構の存在確認に主眼をおいて行った。調査地は山林部分と水田部分とに大別できるが、山林部分には主稜線と支稜線の尾根上及び山裾、谷に30本、水田部分には4本の合計34本のトレンチを設定した。

墳墓遺構の存在が予想される山林の尾根については、調査前に現地踏査を行い、傾斜の変換点や平坦地、部分的な落ち込み等を目安にトレンチを設定した。また生活跡の存在が予測される山裾部、谷部にもそれぞれトレンチを設定した。そのほか、必要に応じてこれらのトレンチを延長、または新たにトレンチを設定した。桂見6号墳については、規模確認のためのトレンチを墳裾部に3本、主体部確認のためのトレンチを後円部墳頂部に2本それぞれ設定した。なお、便宜上各トレンチを以下のように区分けした。（A区；T－1，2，3，4，7，8．B区；T－5，6，9，14．C区；T－10，11，12．D区；T－13，18，19，20，21，22．E区；T－26，27，28，29．F区；T－15，16，25．G区；T－23，24，30，31．）

次に沖積地である水田部分については、昭和51年の調査結果を参考にしながら、遺物散布のより詳細な範囲確認のためのトレンチを設定した。（H区；T－32，33，34，35）

トレンチ掘り下げは基本的には調査地のほぼ中央に位置するA区から始め、B区、C区、F区、G区、D区、E区、H区の順番に行った。その方法としてはまず腐葉土及び表土の除去を行い、平面的に遺構の有無を確認しながら進めていったが、最終的にはトレンチの断面の分層によって遺構の有無を確認した。なお検出した遺構については、必要に応じて掘り下げ、その性格を把握した。

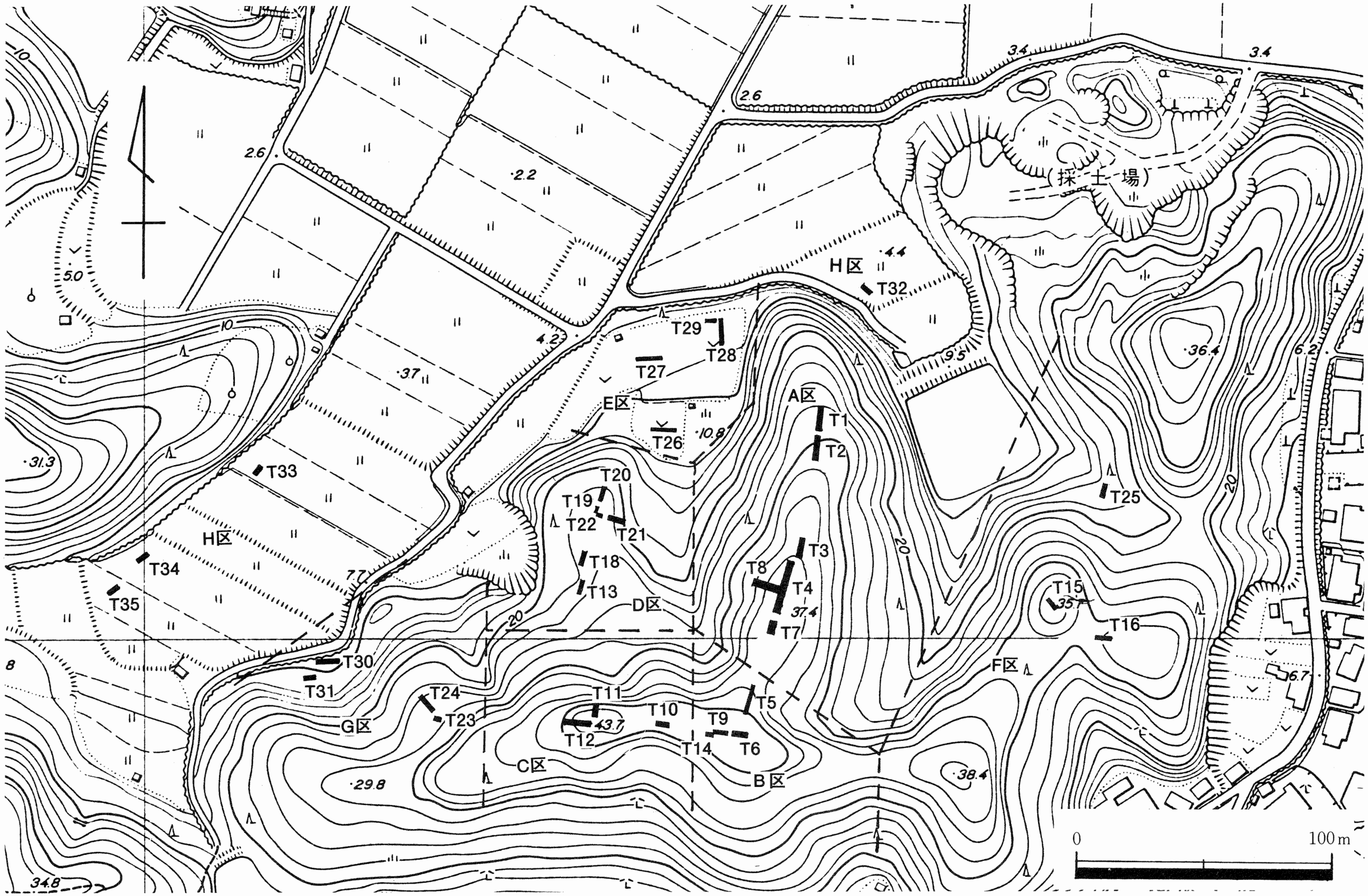
その結果、山林部分の尾根上からは溝状遺構、埋葬施設等が検出され、若干の土器片、管玉等が出土した。また山裾部、谷部からは、土坑、住居跡、ピットが検出され、多量の土器片が出土した。水田部分からは遺構は検出されなかったが、遺物包含層を確認した。調査したトレンチについては、平面図及び断面図を作成し、写真撮影を行った。実測に際しては、各トレンチ付近に基準高を設定し、これを使用した。

このトレンチ掘り下げによって、発掘調査の総面積は最終的に358㎡となった。なお、調査終了後すべてのトレンチの埋め戻しを行った。

2．トレンチ調査の概要

(1)　A区の概要

A区は、調査地のほぼ中央に位置し、北に延びる支稜線の尾根上を範囲とする。尾根上は比較的平坦で面的な広がりを持ち、地形的に墳墓遺構が存在する可能性が推察された。尾根に平行に北から第1、第2、第3、第4、第7の各トレンチを設定し、さらに第4トレンチに直交して西に伸び



(採土場)
H区
T32
A区
T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
T9
T10
T11
T12
T13
T14
T15
T16
T18
T19
T20
T21
T22
T23
T24
T25
T26
T27
T28
T29
T30
T31
T33
T34
T35
B区
C区
D区
E区
F区
G区
H区
37.4
43.7
36.4
38.4
29.8
31.3
34.8
0
100 m

第5図　トレンチ配置図

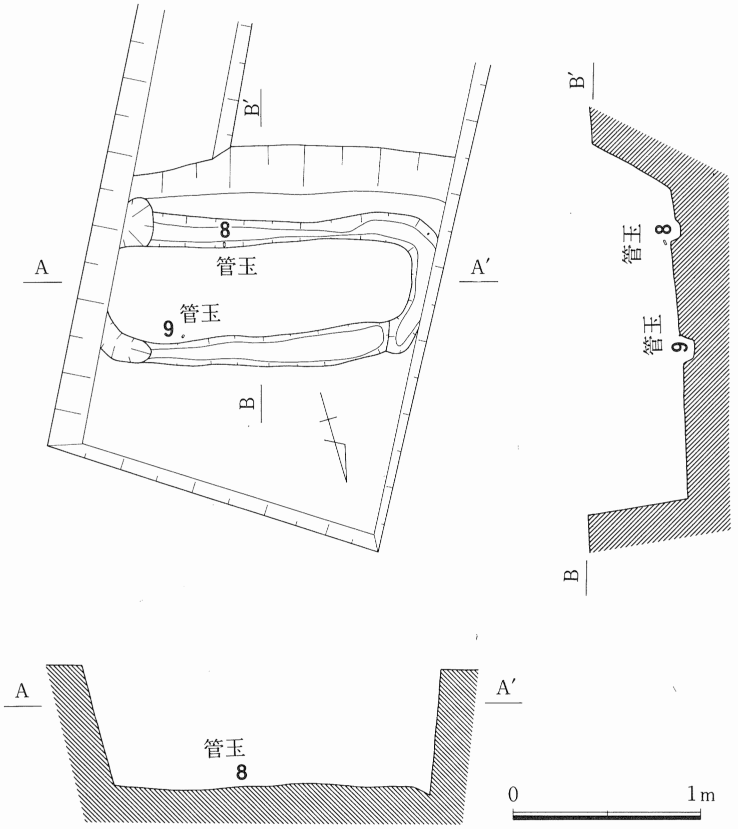
る第８トレンチを設定した。現地形及び地山地形は第４トレンチ付近より南北に緩やかに傾斜する。第３、第４、第７、第８トレンチでは灰黄色シルトを表土層とし、第１、第２トレンチでは灰褐色土を表土とする。第４トレンチでは、腐葉土下、表土層上面に溝状遺構ＡＳＤ−５を検出したが、その他の遺構についてはすべて表土下で検出した。ＡＳＤ−４，６は地山面より掘り込まれるが、ＡＳＤ−１〜３，ＡＳＸ−１は黄褐色土層または灰黄褐色土層上面より掘り込まれている。各トレンチの層位的な所見より、ＡＳＤ−１〜４，６，ＡＳＸ−１は同時期のものと考えられ、ＡＳＤ−５はそれ以後のものであると判断される。以下各トレンチの調査結果について要約する。

第１トレンチ（第７図）

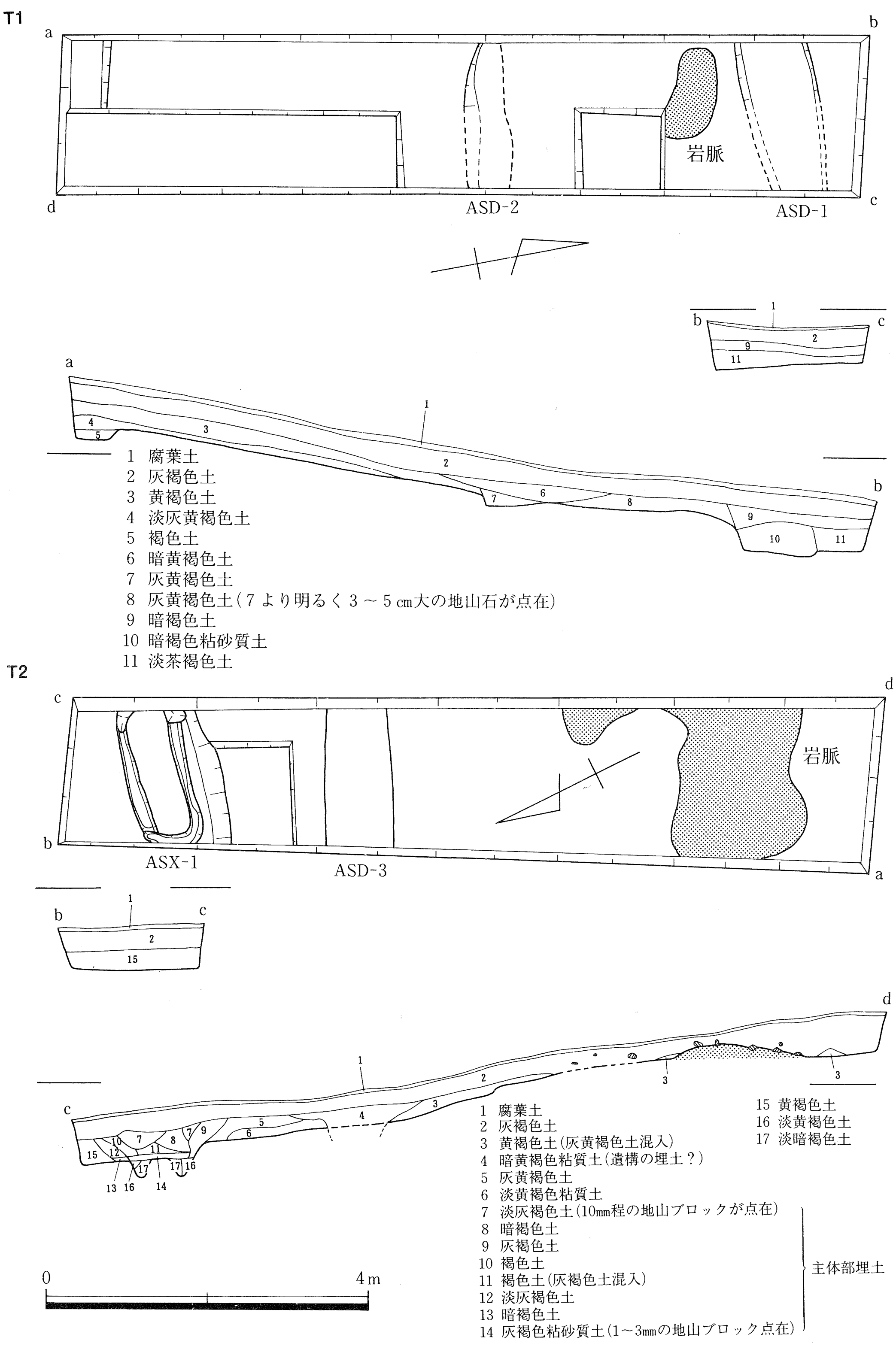
Ａ区の最北部に位置する。表土下25〜35cmの黄褐色土層及び灰黄褐色土層上面が遺構面である。トレンチを東西に横切る溝状の遺構（ＡＳＤ−１）をトレンチ北側で検出、掘り込みは地山面まで及ぶ。またトレンチ中央付近に地山を段状に削る部分があり、北側の肩が流出した溝状の遺構（ＡＳＤ−２）と考えられる。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。

第２トレンチ（第６，７，12図）

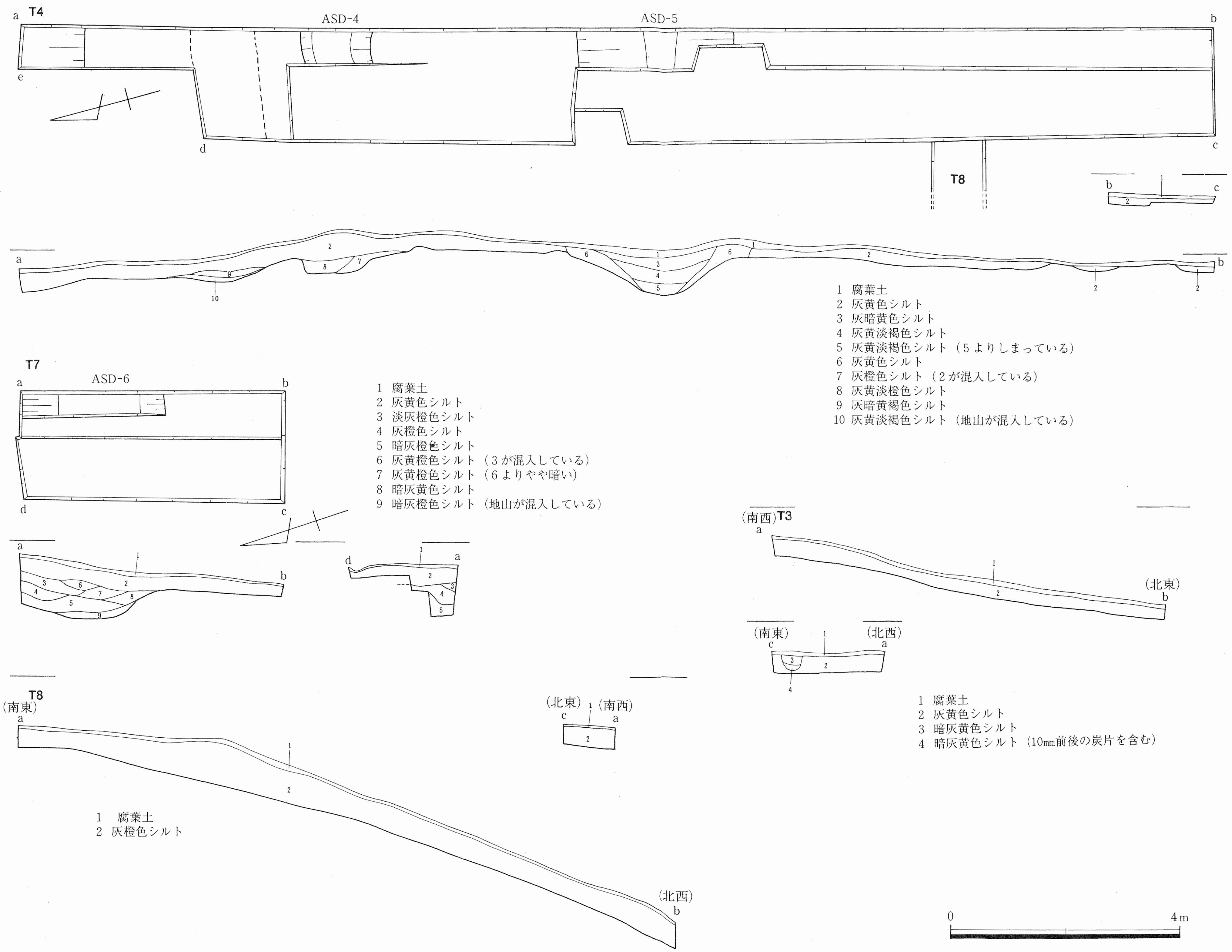
第１トレンチの南に位置する。表土下15〜25cmで遺構面である黄褐色土層上面に達するが、南側



第６図　Ｔ２・ＡＳＸ−１実測図



第7図 トレンチ実測図(T1・2)



第8図　トレンチ実測図（T3・4・7・8）

の高位部にいたってこの層は途切れ、表土下は地山面となる。一部に岩脈の露頭がみられる。トレンチ北側では埋葬施設と考えられるＡＳＸ－１を検出した。木棺の側板の掘り込みと思われる溝が全周し、小口は湾曲している。床面は長さ1.6ｍ前後で幅0.5ｍ、溝の幅は10～20㎝で深さ５～８㎝、断面逆台形を呈する。床面より若干浮いた状態で滑石製の管玉２が出土している。主軸方向はＮ74°Ｗで、尾根にほぼ直交している。ＡＳＸ－１より南に1.2ｍ離れて、トレンチを東西に横切る溝状の遺構ＡＳＤ－３がある。遺物は検出されなかった。

第３トレンチ（第８図）

第２トレンチの南に位置する。表土下22～35㎝で地山面に達する。トレンチの南端部で、表土層中に掘り込まれたピットを検出した。埋土中に炭片を含む。遺物は検出されなかった。

第４トレンチ（第８図）

第３トレンチの南に位置する。遺構面は二面にわたり、トレンチほぼ中央で腐葉土下にＡＳＤ－５を検出し、またこれより北側に表土下30～50㎝でＡＳＤ－４を検出した。両者ともトレンチを東西に横切る溝状遺構である。なおＡＳＤ－４の北側に土色の違いが帯状にみられたが、地山加工は認められないと判断した。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。

第７トレンチ（第８図）

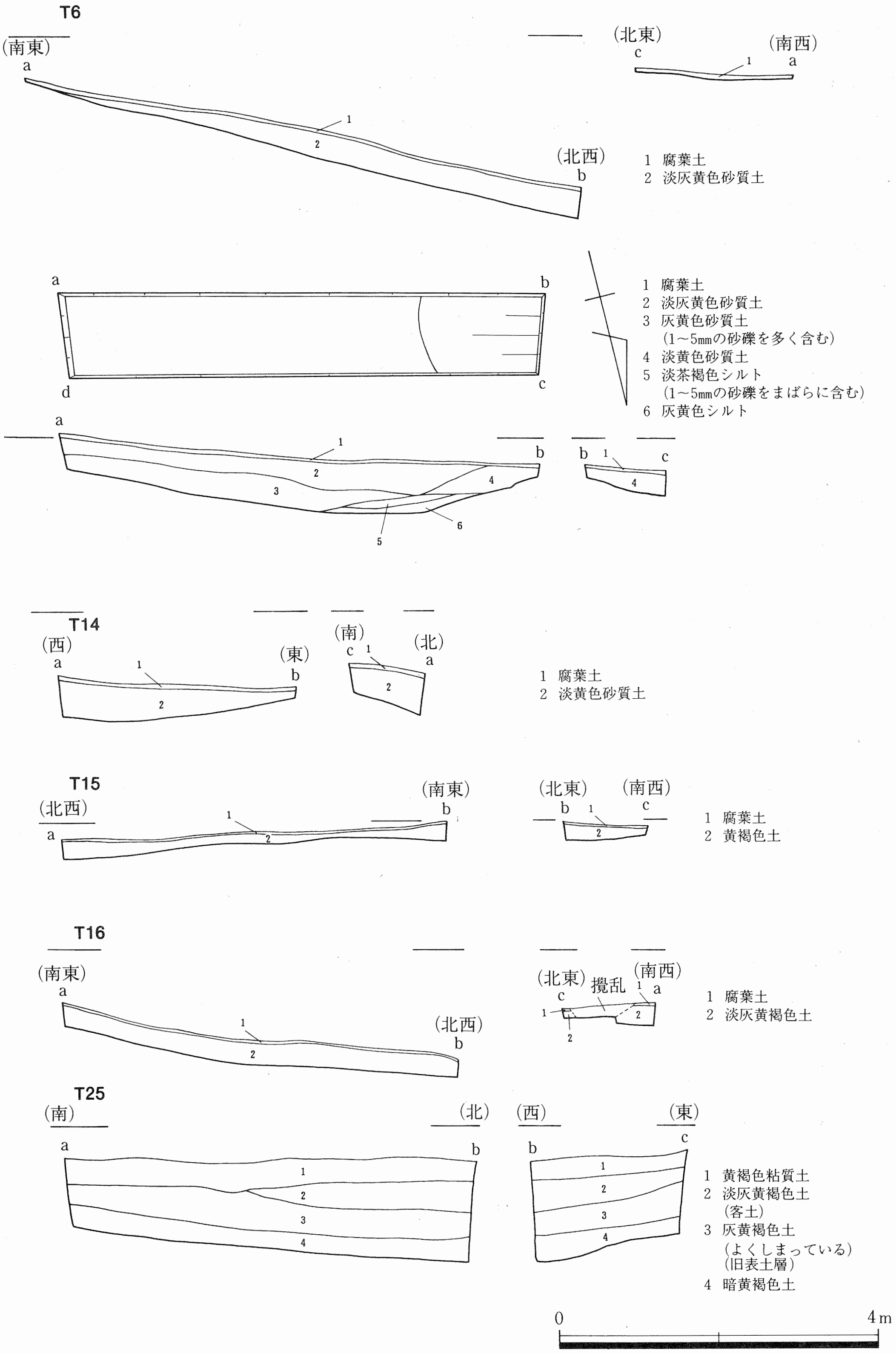
第４トレンチの南に位置する。表土下22～38㎝で地山面に達し、この面より溝状遺構ＡＳＤ－６が掘り込まれている。北側の肩はトレンチ外で検出していないが、埋積状況や第４トレンチの土層断面から、南側の肩より高位となるものと思われる。遺物は検出されなかった。

第８トレンチ（第８図）

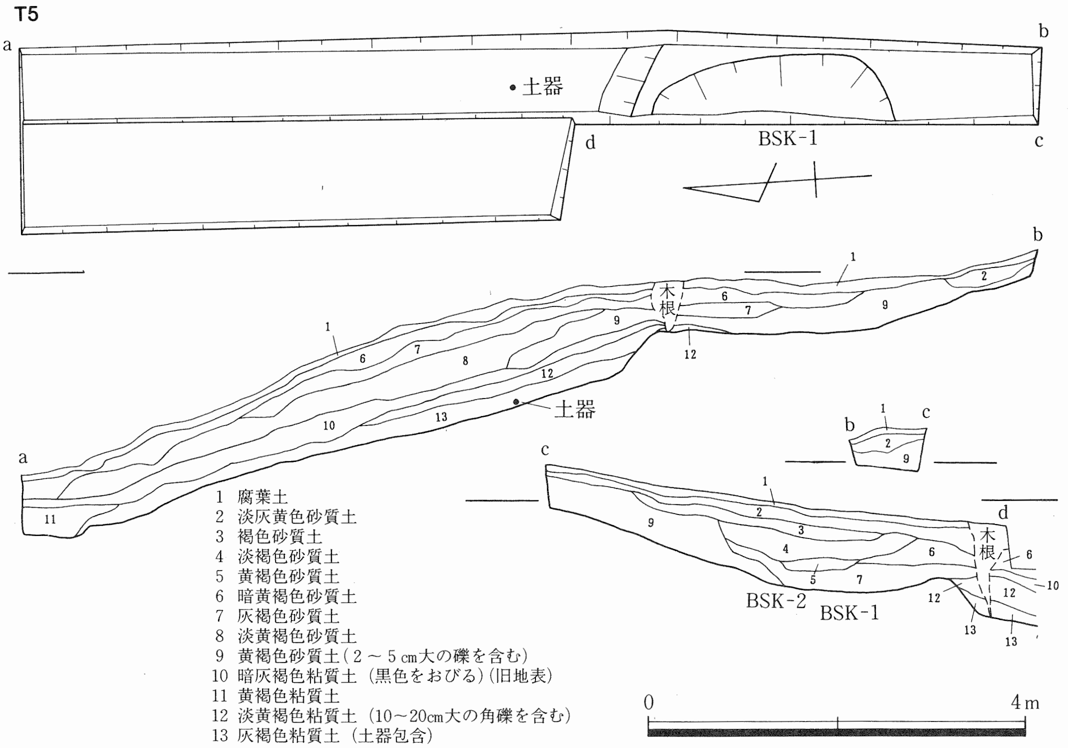
第４トレンチに直交し、尾根の西側斜面上に設定したトレンチである。トレンチの東西両端部では表土下40㎝で地山に達するが、尾根の傾斜変換点付近では表土の堆積は80㎝となる。遺構、遺物は検出されなかった。

(2)　Ｂ区の概要

Ｂ区は、Ａ区の南側に位置し、丘陵主稜線の尾根の東側高位部を中心とする範囲である。遺跡分布図[24]上に桂見４号墳と５号墳の存在が記されている地区であるが、現状においては不明確であった。現地形は尾根の東端部が小支丘状で最も高く、西方に向かって傾斜し平担部へと連なる。また尾根に直交して支稜線が北方へ延び、Ａ区に向かって傾斜する。尾根上には斜面から平担面へと移る変換点に尾根に平行に第６トレンチを設定し、西方へ第９、第14トレンチと続く。また第６トレンチに直交し、支稜線に平行する第５トレンチを設定した。地山地形は、現地形にほぼ準じるが、第９トレンチの西側付近で凹部がみられ、第14トレンチ方向へ向かって若干盛り上がる。第５トレンチ付近も現地形にほぼ準じるが、トレンチ中央部南側付近に若干の平担面があり、段差をもって北方へ傾斜が続く。第５、第６、第９トレンチでは淡灰黄色砂質土を表土とし、第14トレンチでは淡黄色砂質土を表土とする。遺構は第５トレンチでのみ検出し、他のトレンチにはみられなかった。た



第9図 トレンチ実測図（T6・9・14・15・16・25）



第10図　トレンチ実測図（Ｔ５）

だし第９トレンチで検出した凹部は、人為的な地山加工とみられる。以下各トレンチごとに要約する。

第６トレンチ（第９図）

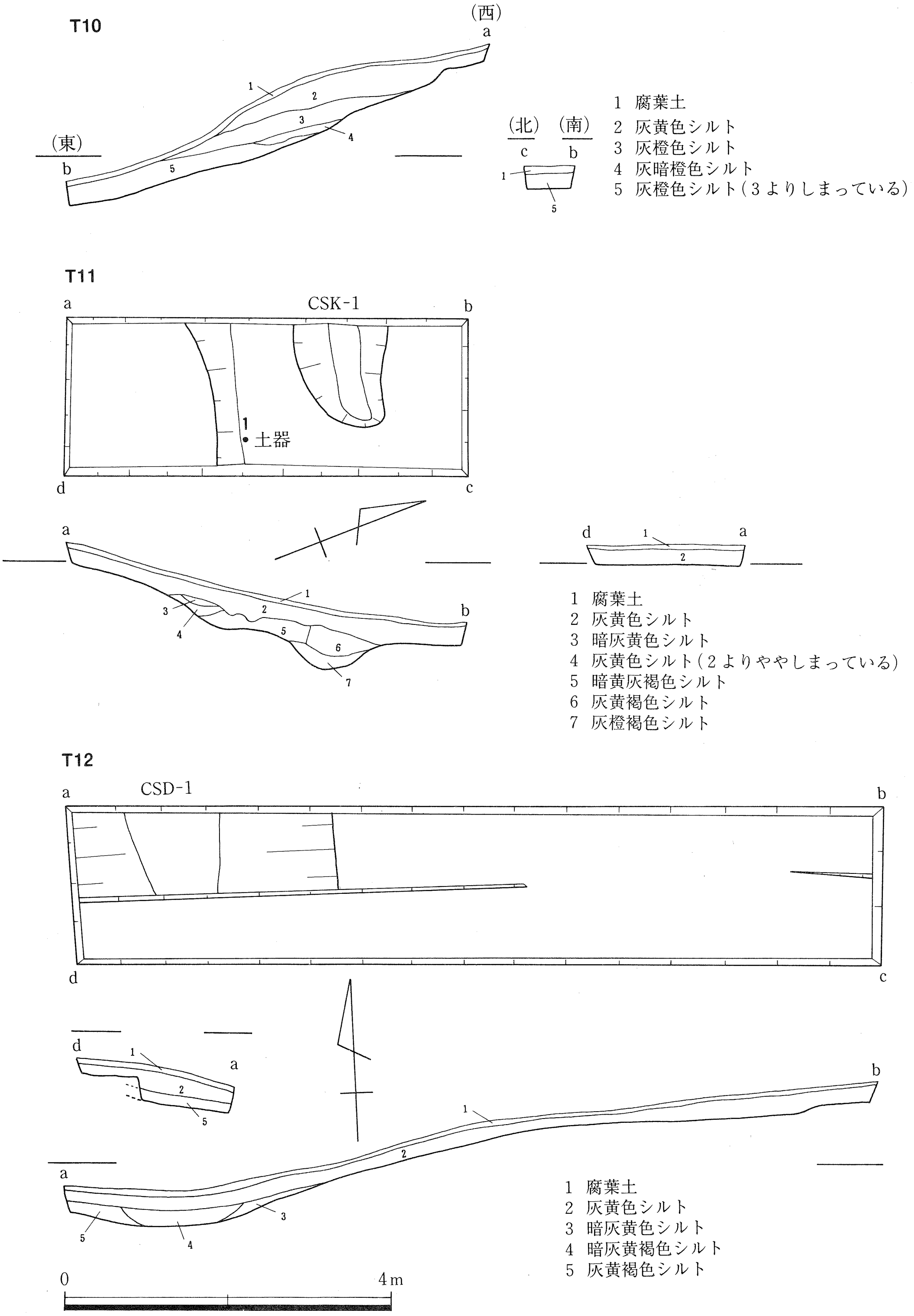
Ｂ区東端の小支丘部の西側裾部に設定した。この小支丘部を桂見５号墳と推定し墳裾部の確認を図ったが、遺構、遺物の検出はみられず、地山加工の痕跡も把握できなかった。ただしトレンチ東端部では腐葉土下が地山面であり、これより東側に地山加工された墳丘が存在する可能性がある。トレンチ西端では、表土下40cmで地山面に達する。

第９トレンチ（第９図）

第６トレンチの西に連なるトレンチで、現地形では平担部をなしていた。表土下18～68cmで地山面に達するが、地山は凹状の地形を呈する。人為的な地山加工と考えられ、またトレンチ西側では表土下に淡黄色砂質土の堆積が始まり西方に盛り上がっていく様相から、トレンチの西側に墳丘状の施設が築造されていた可能性がうかがわれる。このほかに遺構、遺物の検出はみられなかった。

第14トレンチ（第９図）

第９トレンチを西方に延長したトレンチである。淡黄色砂質土層下15～50cmで地山に達する。地山地形は西方への傾斜を示すが、淡黄色砂質土層上面は第９トレンチに引き続いて平担面をなす。遺構、遺物は検出されなかった。



第11図　トレンチ実測図（T10・11・12）

第５トレンチ（第10図）

第６トレンチの北側に直交するトレンチで、遺跡分布図上では桂見４号墳が位置するあたりである。地山地形は南から北へ傾斜するが、途中人工的な段状部が築かれている。最下層の灰褐色粘質土層は遺物包含層であり、10層の暗灰褐色粘質土層は旧表土層である。ＢＳＫ－１は９層の黄褐色砂質土層から地山にかけて掘り込まれており、皿状の断面形を呈する。ＢＳＫ－２は、ＢＳＫ－１の上層に重複して掘り込まれており、９層の黄褐色砂質土層及び６層の暗黄褐色砂質土層の上面が遺構面である。13層より土器片が出土しているが、器種、時期は不明である。

(3)　Ｃ区の概要

Ｃ区は、丘陵主稜線の尾根の西側高位部を中心とする範囲で、鞍部を挟んでＢ区の西側に隣接する。現地形及び地山地形は、丘陵の頂部を中心に東西方向に緩やかに傾斜し、南北方向は急傾斜となる。調査は、Ｂ区との境界となる鞍部の裾から斜面にかけて第10トレンチを設定し、また丘陵頂部を中心に西方向に第12トレンチ、北方向に第11トレンチを設定し行った。表土はいずれも灰黄色シルトであり、遺構は地山面より掘り込まれていた。以下各トレンチごとに要約する。

第10トレンチ（第11図）

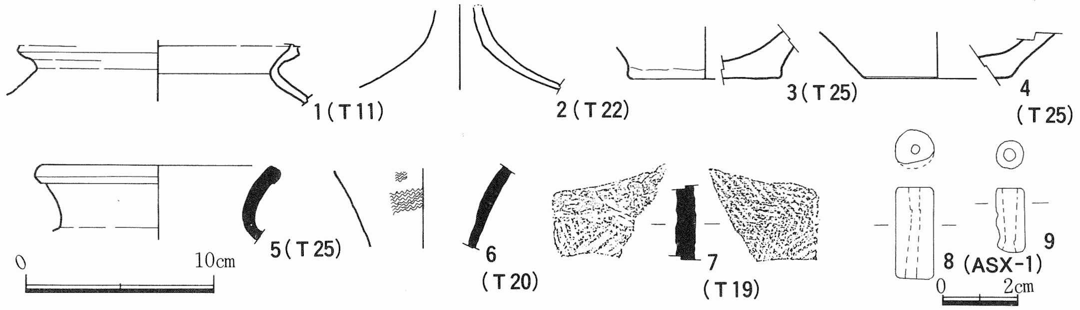
鞍部の斜面から裾部にかけて設定した。鞍部の裾部あたりで表土層が途切れる。表土下10～40㎝で３層にいたり、さらに３層下16～22㎝で５層にいたる。３層と５層の中間層としてブラックバンド（４層・灰暗橙色シルト）が観察されたが、遺構面か否かは判断するにいたらなかった。地山面は西端部に若干の段差部分があり、地山加工の可能性が考えられる。遺物は検出されなかった。

第11トレンチ（第11，12図）

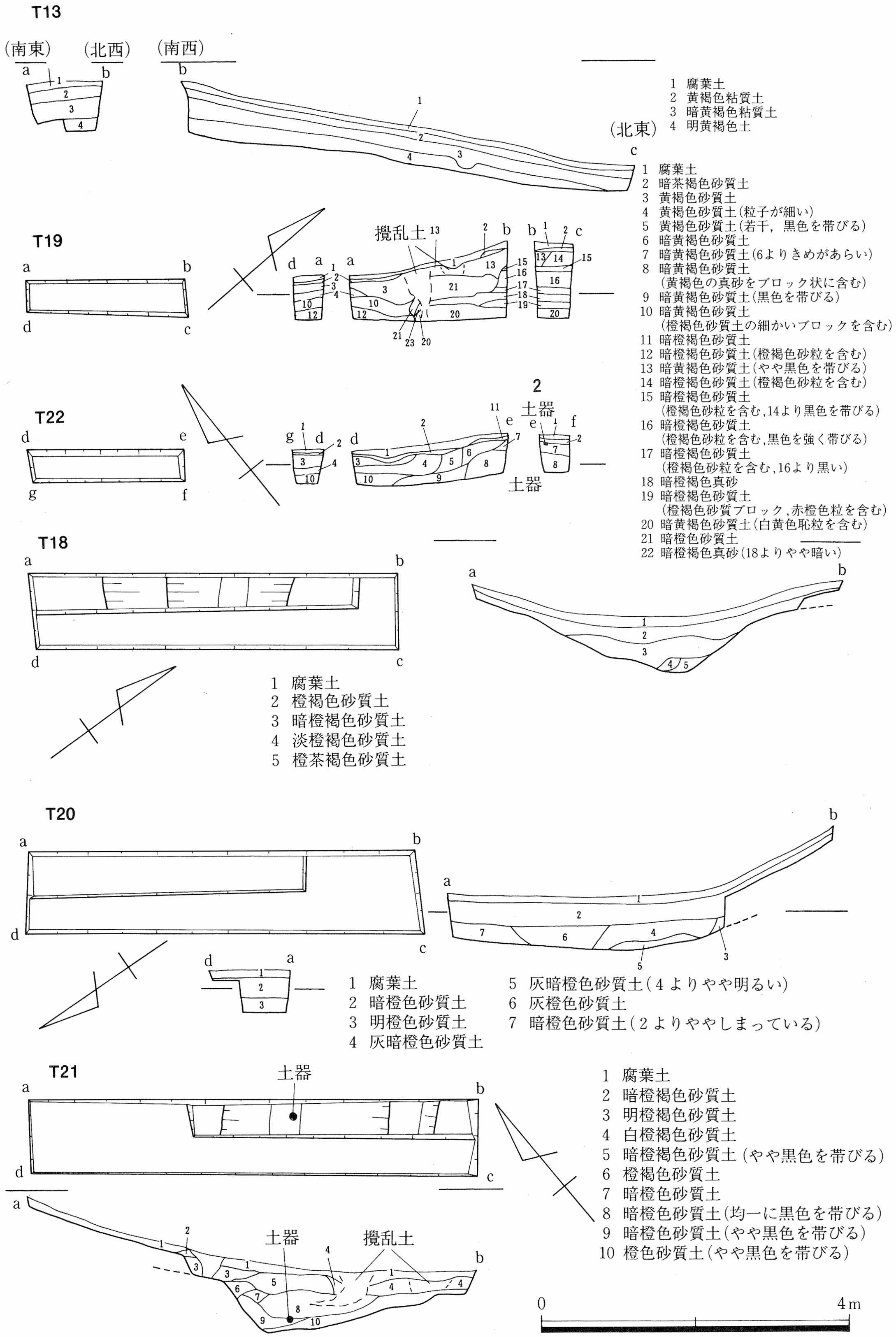
尾根に直交するトレンチである。表土下15～30㎝で地山面に達する。トレンチ中央付近に地山加工による段差があり平坦面が形成されている。段差の裾部付近より甕の口縁部片が出土した。この平坦面よりＣＳＫ－１が検出された。平面は不整な楕円形で、断面は深い皿状を呈する。この土坑内より遺物は出土しなかった。

第12トレンチ（第11図）

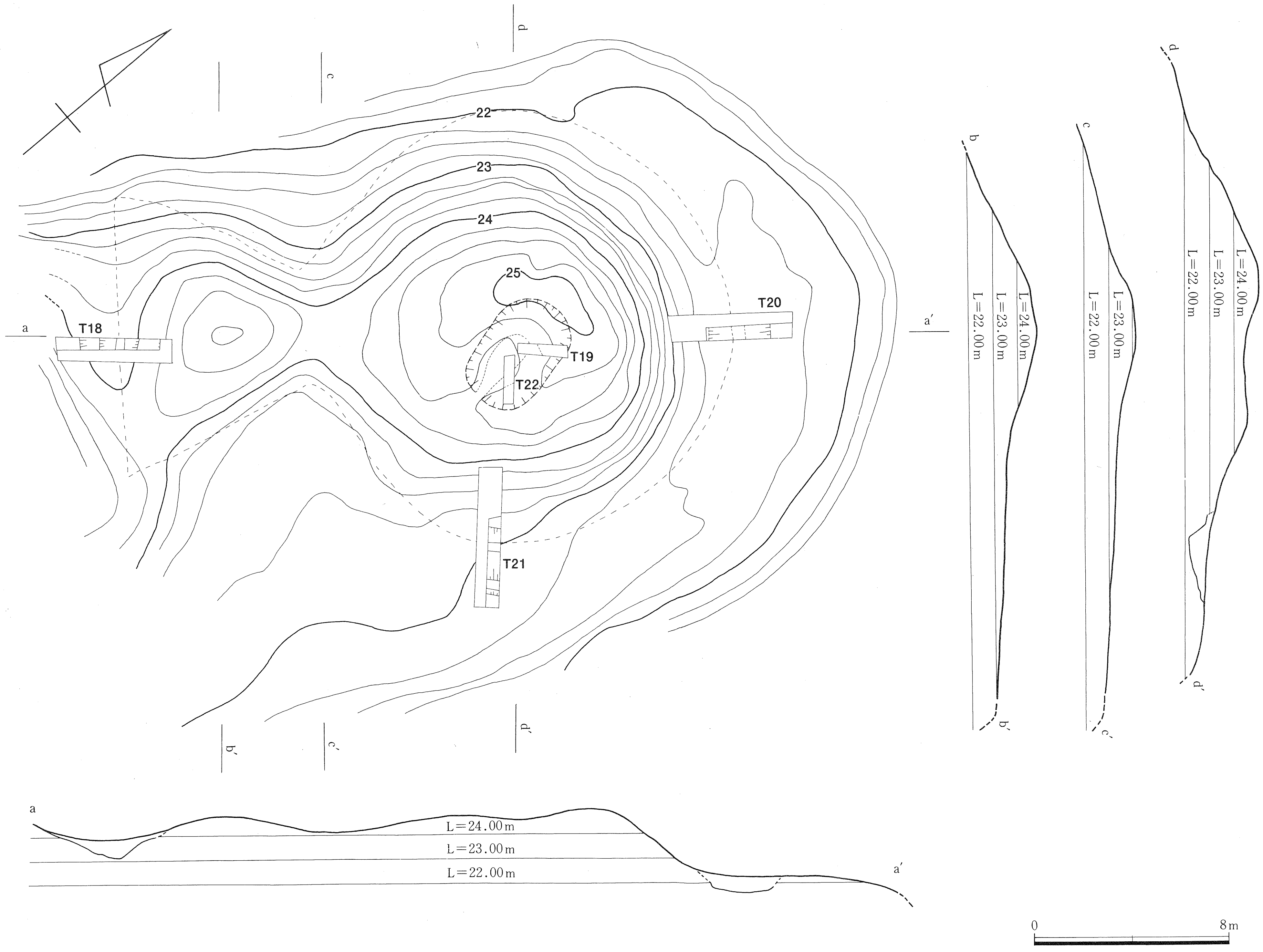
第11トレンチに直交し、西に延びるトレンチである。表土下20㎝で地山面に達するが、トレンチ



第12図　トレンチ出土遺物実測図（Ｔ２・11・19・20・22・25）



第13図　トレンチ実測図（T13・18・19・20・21・22）



第14図　桂見６号墳地形実測図

の西側で溝状の遺構ＣＳＤ－１が検出された。遺物は検出されなかった。

(4) Ｄ区の概要

Ｄ区は、桂見６号墳（前方後円墳）(第14図）を中心とする地区である。桂見６号墳は、Ｂ区付近より北方へ延び、Ａ区の尾根に平行する支稜線の先端付近に位置する。現状ではテラス状の段上に墳丘が立地しているが、畑地として削平されたものであり、本来尾根上の幅は現在より幾分狭かったものと思われる。現状では墳丘の全長22ｍ、後円部径13ｍ、前方部幅10ｍ、高さ２ｍで、後円部墳頂部は盗掘をうけくぼんでいる。Ｄ区では、桂見６号墳の規模確認及び主体部の確認を図るため、現状での墳裾部に第18、第20、第21トレンチを設定し、後円部墳頂部に第19、第22トレンチを設定した。また周辺の様相を把握するため、墳丘の南側尾根上に第13トレンチを設定した。調査の結果、桂見６号墳は全長25.5ｍ、後円部径15ｍ、高さ2.5ｍ以上の規模を有し、幅2.37～2.65ｍ深さ0.65～0.7ｍの周溝を持つものであることが判明した。主体部は盗掘による攪乱が甚だしく、埋葬施設を把握するにいたらなかった。以下各トレンチごとに要約する。

第18トレンチ（第13図）

墳丘の主軸線に沿って前方部端部に設定した。地山面に掘り込まれた幅2.37ｍ、深さ0.7ｍの周溝を検出、遺物は検出されなかった。

第20トレンチ（第12，13図）

後円部裾部に墳丘主軸線に沿って設定した。周溝は平面的には検出できず、土層断面によって確認した。３層の明橙色砂質土層及び７層の暗橙色砂質土層に掘り込まれ、幅2.65ｍ、深さ0.3ｍを測るものであるが、上部は削平されているものと思われる。周溝埋土中より土器細片が出土しており、また表土中より須恵器の壺の頸部が検出されている。

第21トレンチ（第13図）

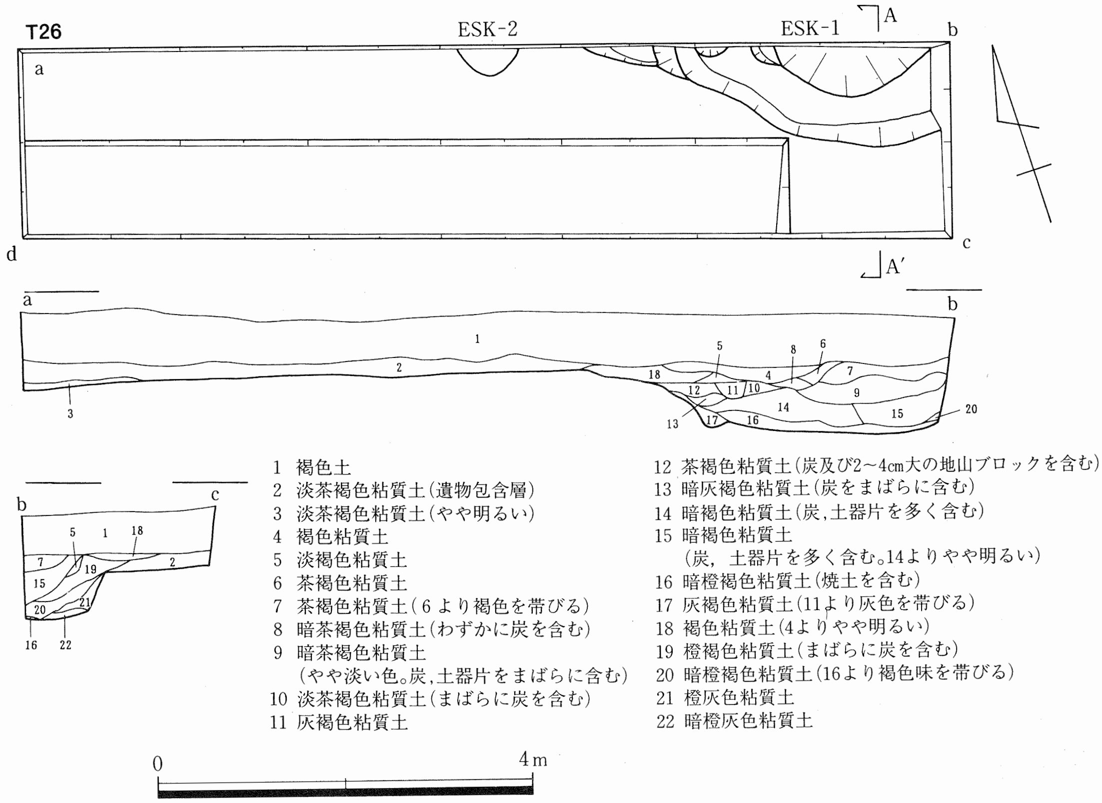
後円部裾部に墳丘主軸線に直交するトレンチを設定した。周溝は幅2.37ｍ、深さ0.65ｍを測り、地山面より掘り込まれている。周溝内より土師器が出土している。

第19，第22トレンチ（第12，13図）

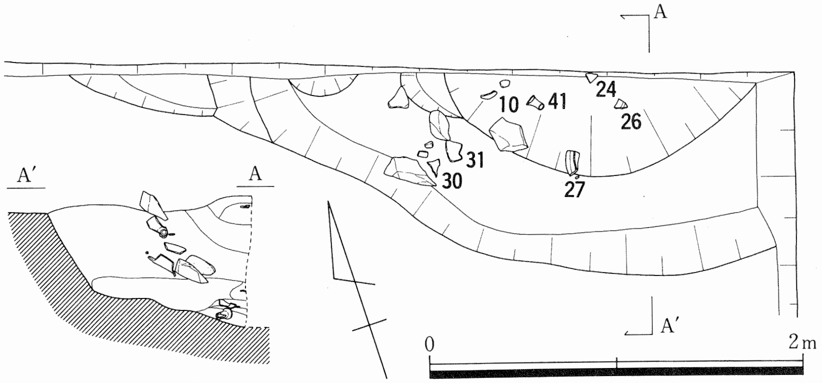
後円部墳頂部に設定したトレンチである。墳丘主軸線上に第19トレンチ、これに直交して第22トレンチを設定した。大幅な攪乱を受けており、主体部を推定できなかったが、墳丘の盛土状況を断面より観察できた。出土遺物は攪乱土中より須恵器の甕胴部片、土師器の高杯脚部片が検出されている。

第13トレンチ（第13図）

桂見６号墳の南側の尾根上に設定した。表土下40～60㎝で地山面に達する。遺構、遺物は検出されなかった。



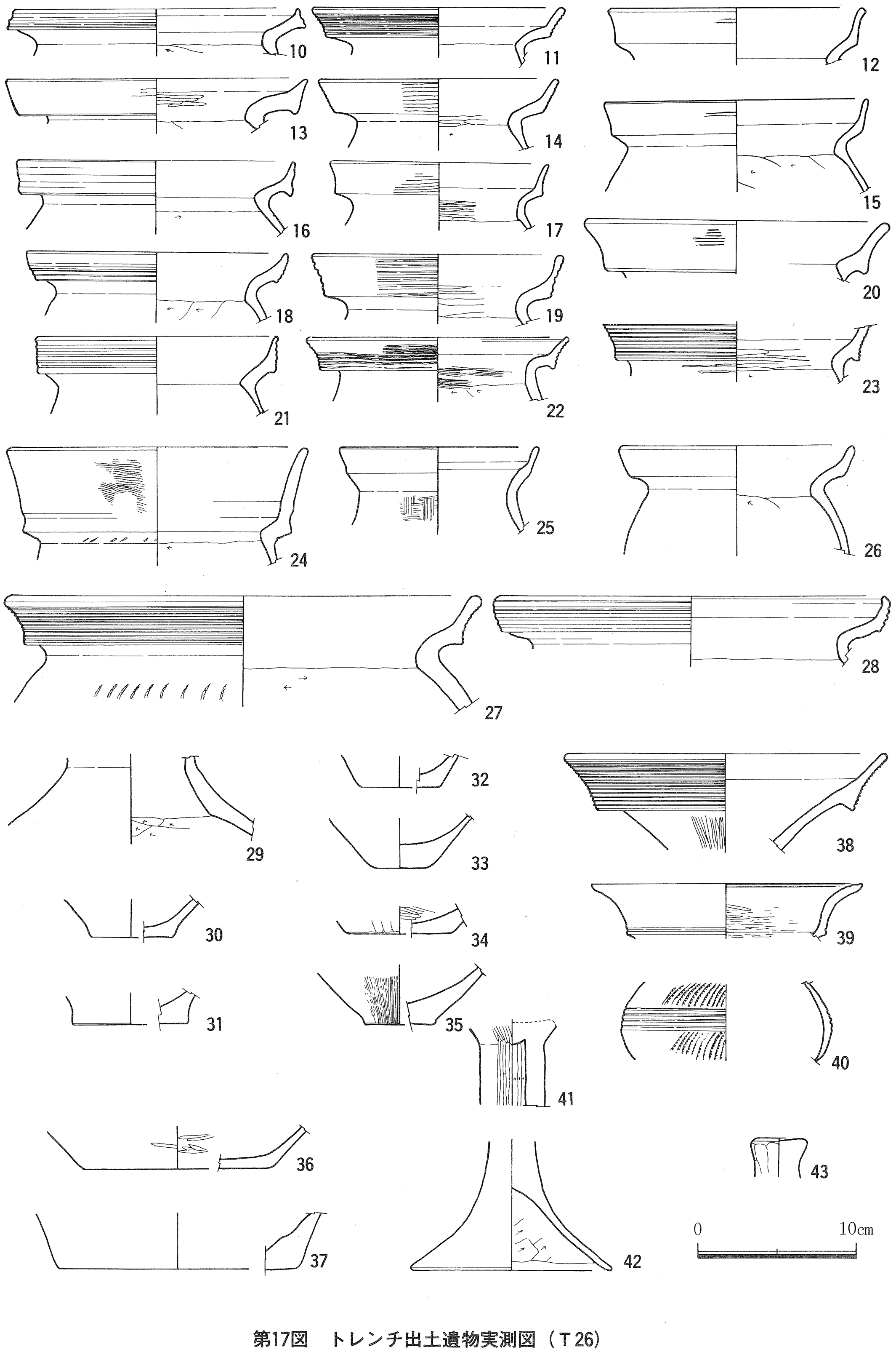
第15図　トレンチ実測図（Ｔ26）



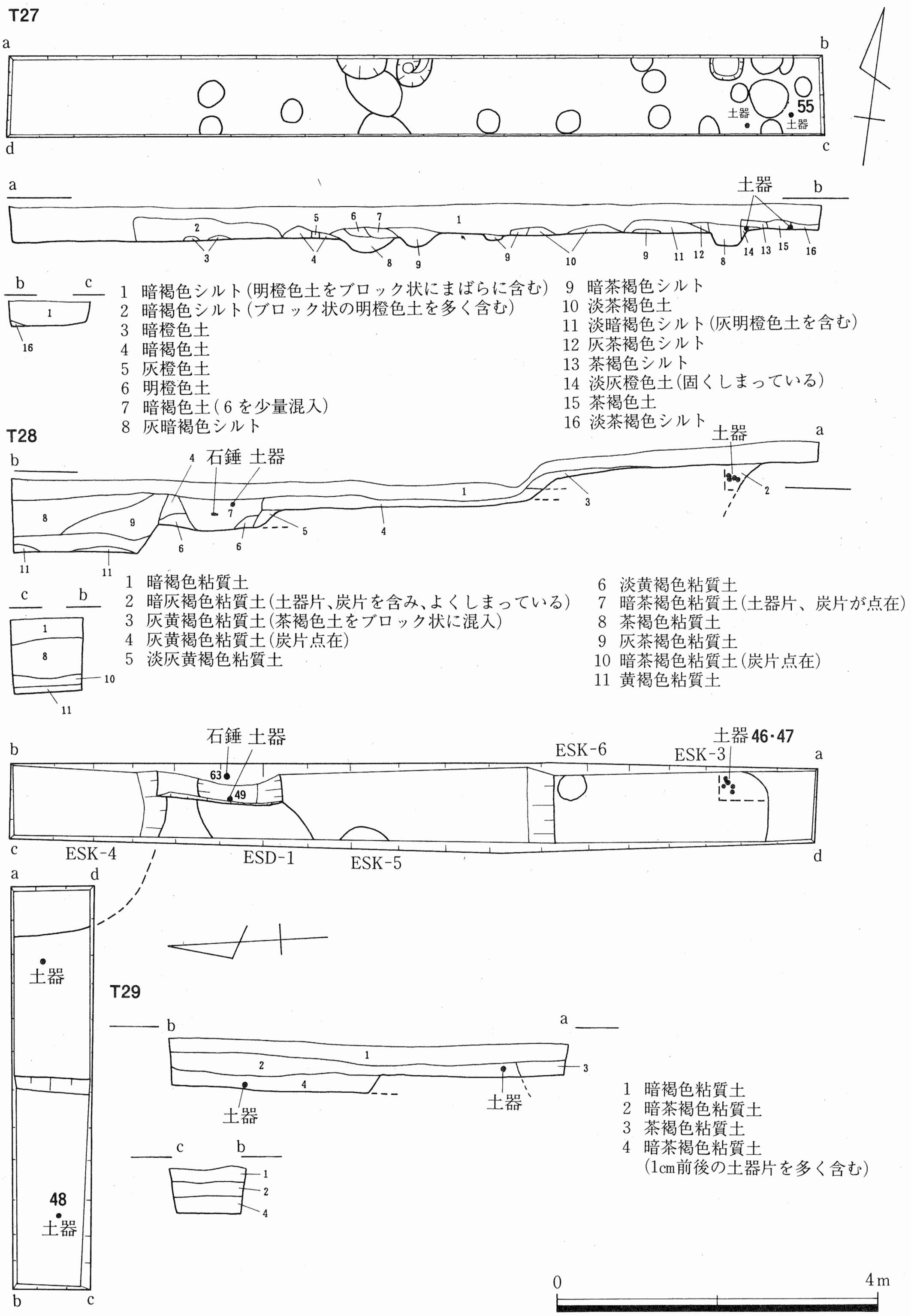
第16図　Ｔ26・ＥＳＫ－１遺物出土状況実測図

(5)　Ｅ区の概要

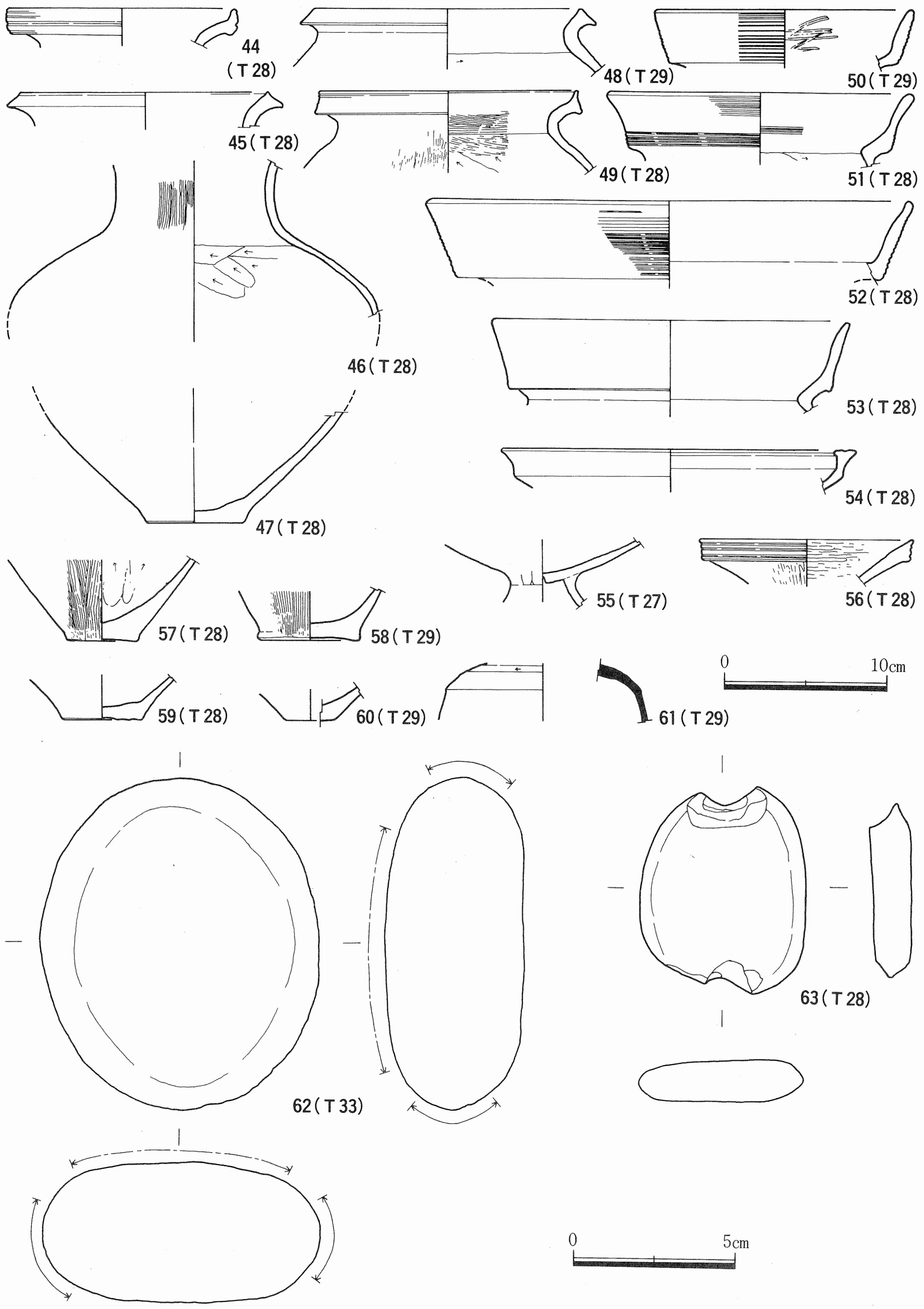
Ｅ区は、Ａ区の尾根とＤ区の尾根に挟まれた谷口の畑地部分が範囲である。現状は緩斜面が段々畑として造成されており、最下段の畑地と沖積面との比高差は約２ｍを測る。耕土中には土器の散布がみられ、地形的にみても生活跡が存在する可能性が考えられた。調査は、最上段の畑地に第26トレンチ、最下段の畑地に第27、第28、第29トレンチを設定し行った。耕土下に遺物包含層がみられるが、畑地造成のため上部は削平されているものと思われる。第26、第27トレンチでは地山面を



第17図　トレンチ出土遺物実測図（T26）



第18図　トレンチ実測図（T27・28・29）



第19図　トレンチ出土遺物実測図（T27・28・29・33）

検出したが、第28、第29トレンチでは地山面にはいたらず、谷の東側は地山地形が深くなっていることがうかがわれる。遺構の検出は、包含層を徐々に掘り下げ、掘り方を追求し、必要に応じてサブトレンチを入れ、遺構の肩を確認した。当初の見通しどおり、住居跡と思われる土坑、柱穴、溝状遺構等生活跡を確認し、Ｅ区のほぼ全域に集落跡が展開することが推定された。以下各トレンチごとに要約する。

第26トレンチ（第15～17図）

最上段の畑地に東西方向に設定したトレンチである。耕土下50cmで遺物包含層である２層の淡茶褐色粘質土層上面に達し、トレンチの東側ではＥＳＫ－１の埋土上面が検出された。２層は10～20cmで地山面に達するが、ＥＳＫ－１より新しい堆積層である。ＥＳＫ－１は、トレンチの北東部隅に弧状の掘り方を検出した。地山面より掘り込まれており、埋積状況は人為的な埋め戻しを示している。土坑の床面はほぼ平担だが、中央部では皿状に浅くくぼむ。このくぼみ内より焼土が検出された。土坑内より多量の土器片が出土しているが、土坑の時期を直接示すものはない。出土した土器は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての壺、甕、高杯、器台で、弥生時代後期前半にさかのぼる甕の口縁部片が１点みられた。このほか地山面にＥＳＫ－２を検出した。

第27トレンチ（第18，19図）

最下段の畑地に東西方向に設定したトレンチである。耕土下35～40cmで地山面に達するが、耕作により遺物包含層は破壊されており、部分的に残存するのみである。遺構は20基のピットを検出したが、上部削平のためピット相互の新旧関係は不明である。一部ピットの並びがみられ掘立柱建物の存在が推定される。遺物は土師器の高杯片が出土している。

第28トレンチ（第18，19図）

最下段の畑地に南北方向に設定したトレンチである。耕土下20cmで包含層に達する。遺構は包含層中に掘り込まれており、トレンチ南側にＥＳＫ－３、北側にＥＳＫ－４を検出した。両者とも比較的大型の掘り方をもつ土坑であるが、ＥＳＫ－３は片側の掘り方しか検出できなかった。土坑の規模や床面の在り方から推して住居跡であると判断される。ＥＳＫ－３の南側のＥＳＤ－１は、トレンチを東西方向に横切る溝状遺構である。このほか土坑２基（ＥＳＫ－５，６）を検出した。遺物は弥生時代後期の甕片、石錘（細粒砂岩製）が出土しているが、遺構の時期を特定できなかった。ただしＥＳＫ－３，４，ＥＳＤ－１は包含層（２層、４層）上面で検出し、ＥＳＫ－５，６は５層上面で検出しており、後者が前者に先行することを示している。

第29トレンチ（第18，19図）

第28トレンチに直交し、東西方向に設定したトレンチである。耕土下15～25cmで２層の茶褐色粘質土層に達するが、遺物の包含はみられなかった。この層上面より土坑が掘り込まれているが、第28トレンチのＥＳＫ－４に対応するものと思われる。２層下10～20cmで遺物包含層である４層の暗茶褐色粘質土層に達するが、４層中での遺構検出はならなかった。遺物は包含層中より弥生時代後期

の土器片が出土し、耕土中より須恵器の杯片が出土している。

(6)　F区の概要

F区は、A区の尾根の東側に展開する地区である。丘稜線東端より延びる尾根上に第15、第16トレンチ、その麓部で溜め池のある谷の奥部に第25トレンチを設定した。第15、第16トレンチは、桂見1号墳、2号墳、3号墳の所在する支丘陵と鞍部を挟んで対峠する尾根上に位置するもので、この尾根上には方形の台状部が現状で確認でき、墳墓の可能性が考えられる。トレンチ調査の結果は部分的なものであり、墳墓としての確証は得られなかったが、依然として遺構存在の可能性は残る。以下各トレンチごとに要約する。

第15トレンチ（第9図）

方形の台状部の西側にある低平な小支丘上に設定した。表土下10～25cmで地山に達する。遺構、遺物は検出されなかった。

第16トレンチ（第9図）

方形の台状部の西側裾部に設定した。表土下30cmで地山に達する。遺構、遺物は検出されなかった。

第25トレンチ（第9図）

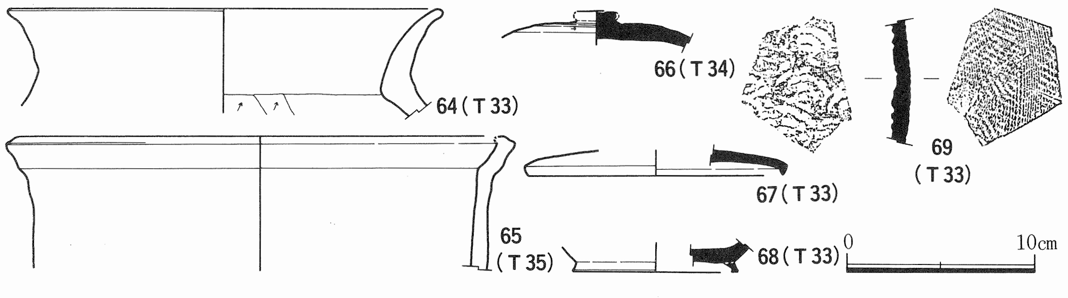
谷奥の畑地上に設定した。耕土下25～65cmで旧地表面に達する。遺物はすべて耕土および客土中出土で、旧表土下での出土はみられなかった。須恵器の甕口縁部片、弥生土器の底部片、釘が出土した。遺構は検出されなかった。

(7)　G区の概要

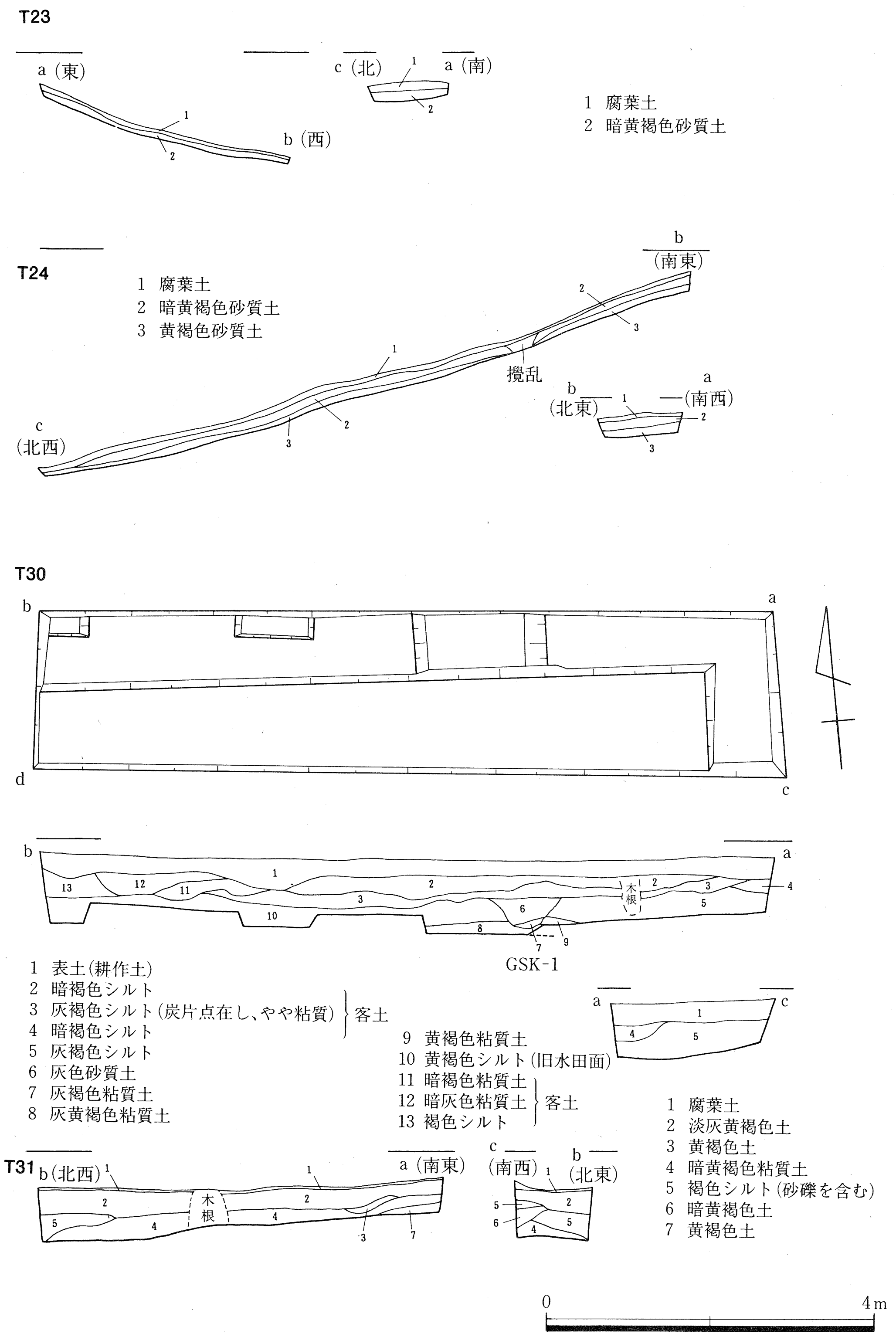
G区は主稜線の尾根の北西斜面に展開する地区で、中腹付近のテラス状部分に第23、第24トレンチ、斜面の麓部で畑地として造成されている段状部上に第30、第31トレンチを設定した。墳墓または生活跡を想定したが、これらに該当する遺構は検出されなかった。以下各トレンチごとに要約する。

第23トレンチ（第21図）

テラス状部分の高位側に設定した。表土下10～20cmで地山面に達する。遺構、遺物は検出されな

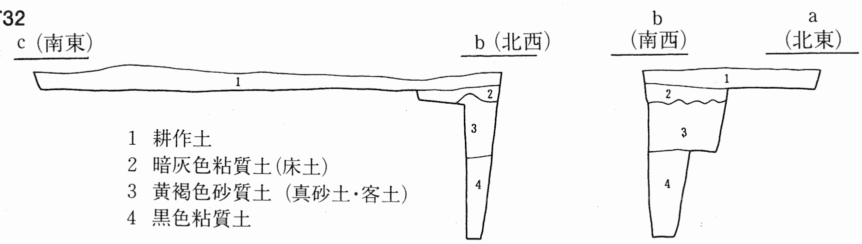


第20図　トレンチ出土遺物実測図（T33・34・35）



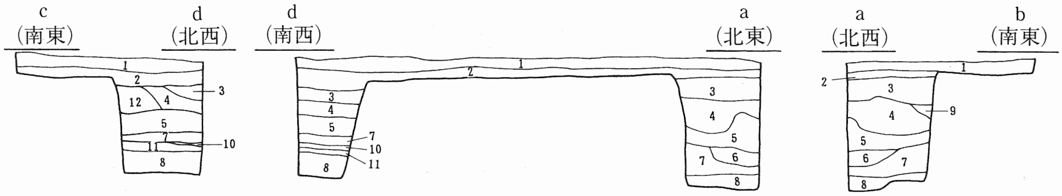
第21図　トレンチ実測図（T 23・24・30・31）

T32



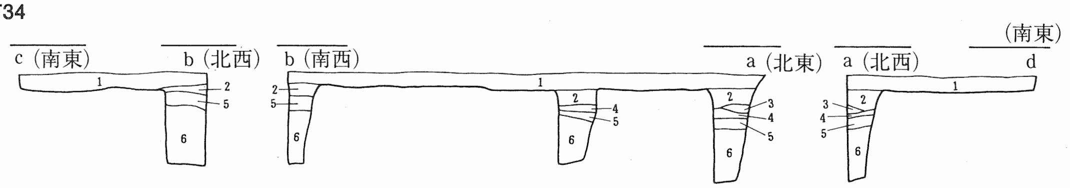
1 耕作土
2 暗灰色粘質土（床土）
3 黄褐色砂質土（真砂土・客土）
4 黒色粘質土

T33



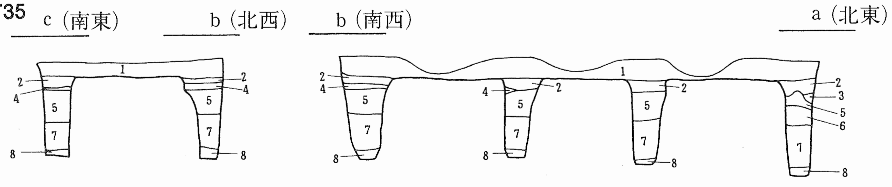
1 耕作土
2 茶灰色粘質土（床土）（客土）
3 黒茶灰色粘質土（黒色粘土ブロック・橙色粘土ブロック混入）
4 橙色粘質土
5 黒色粘質土
6 黒色粘質土（マコモ混土）
7 暗灰色砂
8 灰色粘土
9 橙灰色粘質土（黒色粘質土ブロックを含む）
10 黒色砂（マコモ混土）
11 灰色シルト
12 暗灰色粘土

T34

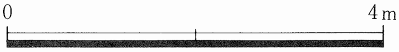


1 耕作土
2 青灰色砂（橙色砂混入）
3 客土
4 淡紫灰色粘質土（橙色粘質土分混り）
5 淡紫灰色粘質土
6 暗灰色粘質土

T35



1 耕作土
2 茶灰色粘質土
3 灰色粘質土
4 橙灰色粘質土
5 淡紫灰色粘質土
6 暗青灰色粘質土
7 暗灰色粘質土
8 灰色砂



第22図 トレンチ実測図（T32・33・34・35）

かった。

第24トレンチ（第21図）

テラス状部上に設定した。表土下10～25cmで地山面に達する。遺構、遺物は検出されなかった。

第30トレンチ（第21図）

沖積面との比高差約２ｍの段上の畑地に設定した。表土下10～40cmで客土層となり、さらに10～40cmで旧水田面に達する。土層断面より、この水田面に掘り込まれた土坑（ＧＳＫ－１）を検出した。そのほかに遺構はなく、遺物はすべて畑の耕土中の出土で、陶器片が検出された。

第31トレンチ（第21図）

第30トレンチの南西部に設定した。表土下40～60cmで旧地表面に達する。遺構は検出されず、遺物は耕土中より土器片が出土した。

(8)　Ｈ区の概要

Ｈ区は、沖積地に広がる水田部にあたる。今回の調査は、遺物散布の範囲確認を主眼として行った。掘り下げは古墳時代の遺物包含層を確認するにとどめ、縄文時代の遺物包含層については追求しなかった。しかし、掘り下げた土層の層位は、昭和51年の調査結果と基本的に同様であり、下層に縄文時代の遺物包含層が存在することが推察される。以下各トレンチごとに要約する。

第32トレンチ（第22図）

Ａ区の尾根の先端付近の水田に設定した。10～25cmの耕土層、10～18cmの床土層下に50～55cmの客土が施されている。遺物包含層はその下層の黒色粘質土層で、95cmの堆積が認められる。須恵器片、土器片、木片を検出した。さらにその下層にはマコモ層を確認したが、上面の検出にとどめた。

第33トレンチ（第19，20，22図）

Ｇ区の丘陵斜面が面する谷の水田部に設定したトレンチである。10～18cmの耕土層、８～20cmの床土層下に25～50cmの客土層がみられる。その下層の５層の黒色粘質土層以下が遺物包含層である。遺物は５層から７層にかけて、須恵器の杯身、杯蓋、横瓶、土師器の甕片、板の破材、磨石（安山岩製）を検出した。

第34トレンチ（第20，22図）

20cmの耕土層下に20～35cmの客土層がみられ、その下層の暗灰色粘質土層が遺物包含層である。45～60cmの堆積で、須恵器片、土師器片、木片を検出した。なお耕土中より須恵器の杯蓋片が出土している。

第35トレンチ（第20，22図）

５～20cmの耕土層下に５～10cmの床土層があり、その下層は30cmの客土層である。遺物包含層である暗灰色粘質土層は30～40cmの堆積を測り、須恵器片、瓦質土器片が出土している。

	大　き　さ （長さ×幅）（m）	遺　　構	出　土　遺　物
第1トレンチ	10×2	溝状遺構2	—
第2トレンチ	10×2	埋葬施設1・溝状遺構1	管玉2個
第3トレンチ	7×2	ピット1	—
第4トレンチ	(18×2)+(3×0.8)	溝状遺構2	—
第5トレンチ	(6×2)+(5×1)	土坑2・地山加工	土器
第6トレンチ	7×2	—	—
第7トレンチ	5×2	溝状遺構1	—
第8トレンチ	(5×2)+(2×1)+(5×1)	—	—
第9トレンチ	6×1	地山加工	—
第10トレンチ	5.6×1	地山加工？	—
第11トレンチ	5×2	土坑1・地山加工	土器
第12トレンチ	10×2	溝状遺構1	—
第13トレンチ	6×1	—	—
第14トレンチ	3×1	—	—
第15トレンチ	5×1	—	—
第16トレンチ	5×1	—	—
第18トレンチ	5×1	桂見6号墳の周溝	—
第19トレンチ	2×0.5	主体部かく乱	須恵器・土師器
第20トレンチ	5×1	桂見6号墳の周溝	須恵器・土師器・磁器・石
第21トレンチ	6×1	桂見6号墳の周溝	土師器
第22トレンチ	2×0.5	主体部かく乱	土師器・陶器
第23トレンチ	3×1	—	—
第24トレンチ	8×1	—	—
第25トレンチ	5×2	—	土器・陶磁器・釘
第26トレンチ	10×2	土坑2	土器
第27トレンチ	10×1	ピット20	土器・土師器・石
第28トレンチ	10×1	土坑4・溝状遺構1	土器・石・石錘
第29トレンチ	5×1	土坑1	土器
第30トレンチ	9×2	ピット1	陶器
第31トレンチ	5×1	—	土師器
第32トレンチ	5×2	—	須恵器・土器・木片
第33トレンチ	5×2	—	土器・須恵器・木片・磨石
第34トレンチ	5×2	—	須恵器・木片・土器
第35トレンチ	5×2	—	鉄片・須恵器・土器・瓦質土器
（備考）　第17トレンチは欠番			

第2表　調査トレンチ一覧表

Ⅳ 小　　　結

今回の試掘調査で得られた所見を以下にまとめ、若干の検討を加えてみたい。

丘陵部の調査では、墳墓の存在を示唆する遺構を数ケ所で確認し、尾根沿いに墳墓が形成されていることが推察された。Ａ区では、溝状遺構を６ケ所で検出したが、ＡＳＤ－１、２、４～６については墳墓の周溝である可能性が高い。ただし、ＡＳＤ－５は他のものより新しい段階のものであり、当丘陵における造墓活動が複次にわたるものであることが推察される。ＡＳＤ－３については、検出状況より溝状遺構としたが、ＡＳＸ－１との位置関係や断面形態から推して、埋葬施設である可能性が高い。ＡＳＸ－１は、木棺の側板の掘り込みが全周しており、浮き彫り状の床面を呈する。特徴的であるのは、小口がＵ字形に湾曲する点である。このような木棺の小口穴の例としては、西桂見遺跡(25)のＳＫ－107、108、115、桂見墳墓群(26)の第６土壙墓、紙子谷遺跡門上谷地区(27)の墳墓の例が挙げられる。近年但馬の北浦古墳群(28)中にも検出例が知られ、弥生時代後期を中心として類例は増えつつある。しかし他地域においては今のところ類例をみない。木棺の構造については、複数の丸太材あるいは板材を桶状に並べた小口部が推定されている(29)が、浮き彫り状の床面形態で小口穴がＵ字形を呈するものは知られていない。屍床については、管玉が床面より若干浮いた状態で出土したことより底板が組み合わされていた可能性が考えられる。ＡＳＸ－１の時期については、土器の伴出がみられず明確なことは言いがたいが、管玉の形状や材質（滑石製）からみて古墳時代としておきたい。

Ｂ区は、桂見４号墳、５号墳の存在が遺跡分布図(30)上に記されている地区だが、調査の結果墳墓の存在を直接示す遺構、遺物の検出にはいたらなかった。しかし第５、第９、第14トレンチの調査によって、墳墓の存在を推察する根拠を若干ながら得ることができた。Ａ区およびＣ区との位置関係からみても、Ｂ区に墳墓が存在する可能性は充分考えられる。

Ｃ区では、第11、第12トレンチの調査結果より墳墓が存在することが判断された。ＣＳＤ－１は周溝、ＣＳＫ－１は埋葬施設であると考えられる。出土した土器が古式土師器であり、墳墓の時期として古墳時代前期を与えておきたい。

Ｄ区では、桂見６号墳の規模を確認した。全長25.5ｍで幅2.5ｍ前後の周溝をもつ小型の前方後円墳で、主体部は攪乱されているが、木棺あるいは石棺であることが想定される。墳形は、前方部が後円部に比して小さく、前方部の開きがきつい。このような墳形を呈する前方後円墳は、大熊段１号墳(31)や面影山11号墳(32)などで知られ、いずれも６世紀中頃の時期が与えられている。当古墳については、土器の出土状況がプライマリーな状態ではなく、断言できないが、出土した須恵器をもって６世紀以降としておく。

Ｅ区では、住居跡２棟をはじめ、集落跡の存在を示す遺構が検出された。住居跡は、遺物包含層中に掘り込まれており、わずかな調査面積で時期を特定するには早急に過ぎるが、出土土器は弥生

時代後期後半から古墳時代初頭にかけての時期のものが主体をなすことを記しておく。ＥＳＫ－１については、その性格を明らかにしえなかったが、人為的な埋め戻しや遺物の流入が観察されることより、意図的な廃棄がうかがわれる。側溝などの住居跡的な構造を示さず、住まいとしての機能は考えがたい。時期は、出土土器がすべて流入品であり、特定できないが、弥生時代後期前半から古墳時代初頭にかけての時期のものが出土していることを記しておく。

Ｆ区の第15、第16トレンチでは、遺構、遺物の検出はみられなかったが、方形の台状部が墳墓である可能性は残る。

沖積地の水田部での調査は、古墳時代以降の遺物包含層を確認し、散布地が谷の奥部にまで広がることを明らかにした。第33～第35トレンチの包含層の上面のレベルが、谷奥から谷口に向けて下がっており、このことは、谷の最奥部の丘陵端部付近に古墳時代以降のなんらかの遺構が存在することを示唆するものである。

以下に要約する。

- Ａ区、Ｂ区、Ｃ区には墳墓群が形成されている。
- Ｄ区の桂見６号墳は全長25.5ｍで幅2.5ｍ前後の周溝を有する前方後円墳で、主体部は攪乱をうけているものの、石棺あるいは、木棺であることが想定される。
- Ｅ区の集落跡は、谷のほぼ全域に広がり、竪穴住居、掘立柱建物等が存在する。
- Ｆ区の方形台状部については、墳墓である可能性がある。
- Ｈ区の水田部は、谷奥部まで散布地が広がり、丘陵の端部に遺構が存在する可能性が高い。

今回の調査で以上の所見が得られ、所期の目的は充分達成されたものと思われる。調査に際し、発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々の御協力、御教示を受けた。記して謝意に代えたい。

註

(1)『鳥取県史』　鳥取県　1972年

(2)『桂見遺跡発掘調査報告書』　鳥取市教育委員会　1978年

(3)『布勢遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団　1981年

(4)『帆城遺跡・天神山遺跡発掘調査報告書』　鳥取市教育委員会　1982年

(5)　前掲註(4)

(6)『湖山第２遺跡発掘調査報告書』　鳥取県教育文化財団　1982年

(7)『古海遺跡発掘調査概報』　鳥取市教育委員会　1981年

(8)『岩吉遺跡』　岩吉遺跡発掘調査団　1976年

「岩吉遺跡Ⅱ」『鳥取市文化財報告書13』　鳥取市教育委員会　1983年

(9)　前掲註(3)

⑽『大桷遺跡・Ⅰ』　鳥取市教育委員会　1978年
「大桷遺跡・Ⅱ」『鳥取市文化財報告書13』　鳥取市教育委員会　1983年
⑾　前掲註(1)
⑿『桂見墳墓群』　鳥取市教育委員会　1984年
⒀『西桂見遺跡』　鳥取市教育委員会　1981年
⒁『西桂見遺跡Ⅱ』　鳥取市教育委員会　1984年
⒂『里仁古墳群』　鳥取県教育文化財団　1985年
⒃『鳥取県文化財調査報告書第11集』　鳥取県教育委員会　1979年
⒄『三浦遺跡』　鳥取県教育文化財団　1982年
⒅　前掲註⒄
⒆『葦岡長者古墳発掘調査報告書』　明日の湖南を考える会　1984年
⒇『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』　鳥取県教育委員会　1973年
(21)「石棺式石室の研究」『古代の出雲を考える6』　出雲考古学研究会　1987年
(22)『天神山遺跡発掘調査概報』　鳥取県教育委員会　1973年
(23)「鳥取市山王社宝篋印塔とそれを載せる絵図について」　小谷仲男　『鳥取大学教育学部研究報告』（人文社会科学）第30巻第2号　鳥取大学教育学部　1973年
(24)『鳥取市の埋蔵文化財包蔵地分布図』　鳥取市教育委員会　1983年
(25)　前掲註⒁
(26)　前掲註⑿
(27)『紙子谷遺跡発掘調査現地説明会資料』　鳥取市遺跡調査団　1987年
(28)『北浦古墳群・立石墳墓群』　豊岡市教育委員会　1987年
(29)　前掲註⒁
(30)　前掲註(24)
(31)　前掲註⒄
(32)『面影山古墳群発掘調査現地説明会資料』　鳥取市遺跡調査団　1985年

図　　版

図版 1

1．調査地遠景（北から）

2．調査地遠景（南東から）

3．調査地近景（T26～29・北から）

4．桂見6号墳（北側・後円部から）

図版 2

1. 第1トレンチ（北から）

2. 第2トレンチ（北から）

3. 第2トレンチ・ＡＳＸ－1検出状況（北から）

4. 第2トレンチ・ＡＳＸ－1完掘状況（北から）

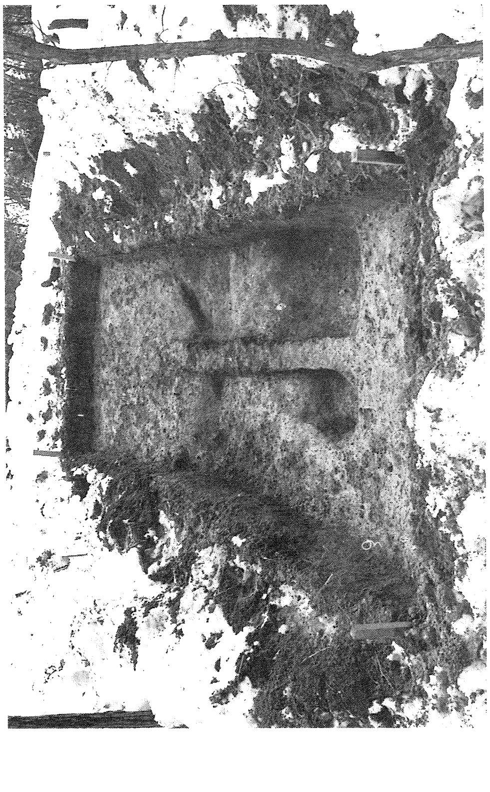
1．第4トレンチ（北から）

2．第4トレンチ（南から）

3．第7トレンチ（南から）

4．第5トレンチ（南から）

図版 4



1．第11トレンチ（北から）

2．第12トレンチ（東から）

3．第18トレンチ（南から）

4．第20トレンチ（北から）

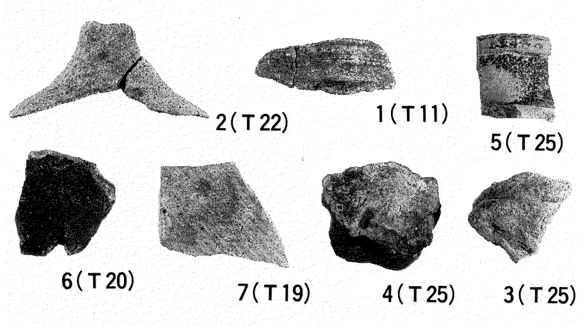
1．第26トレンチ（東から）

2．第26トレンチ・ESK－1（東から）

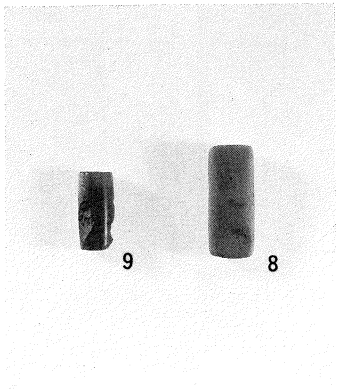
3．第27トレンチ（西から）

4．第29トレンチ（西から）

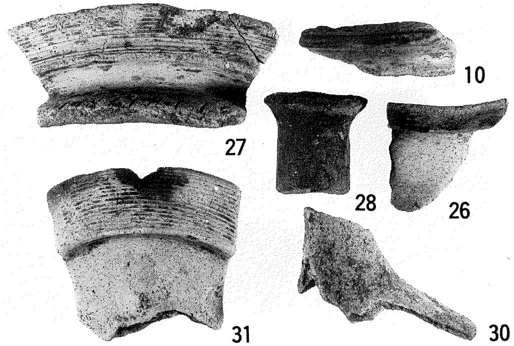
図版 6



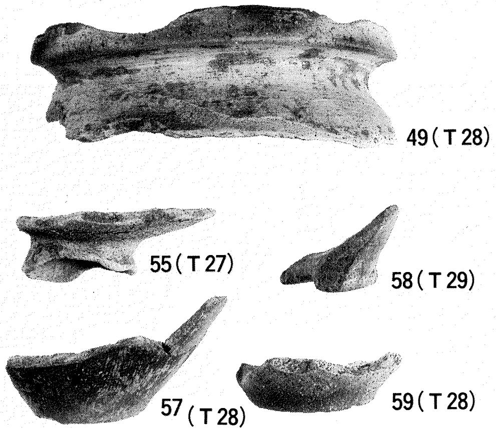
T11・19・20・22 出土土器



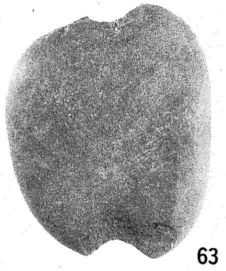
T2・ASX-01 出土管玉



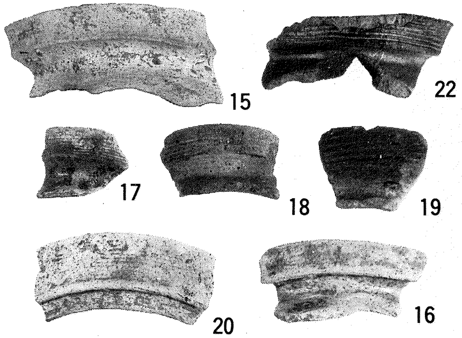
T26 出土土器



T27・28・29 出土土器

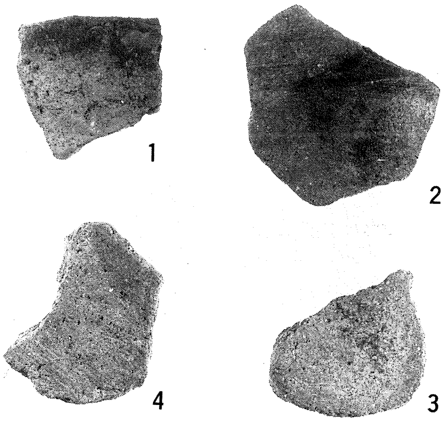


T28 出土石錘



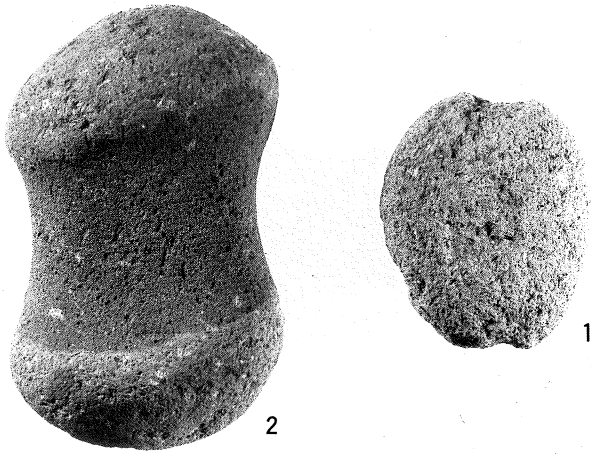
T26 出土土器

図版 7

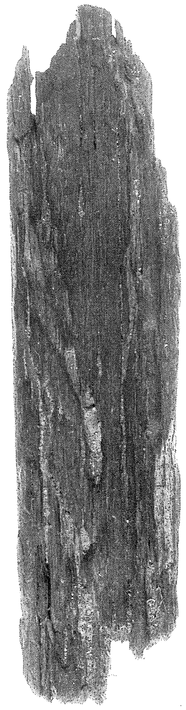


表採　縄文土器

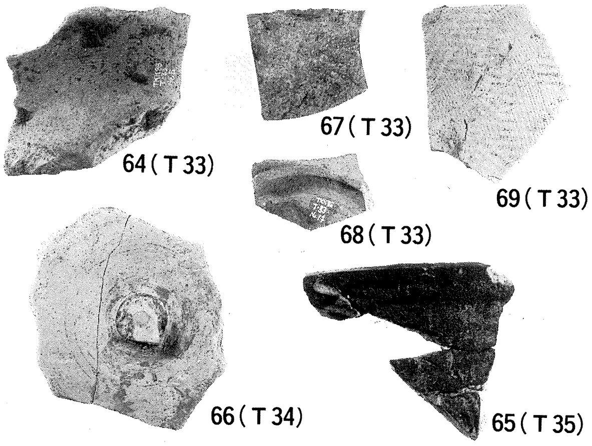
T 33 出土磨石



表採　石　錘



T 33 出土板材



T 33・34・35 出土土器

鳥取市文化財報告書 23

桂見古墳群・桂見遺跡
発掘調査概要報告書

昭和63年3月　印刷・発行

編集・発行　鳥取市教育委員会

印刷所　株式会社矢谷印刷所